

半閒窻談

水滸後傳國字評

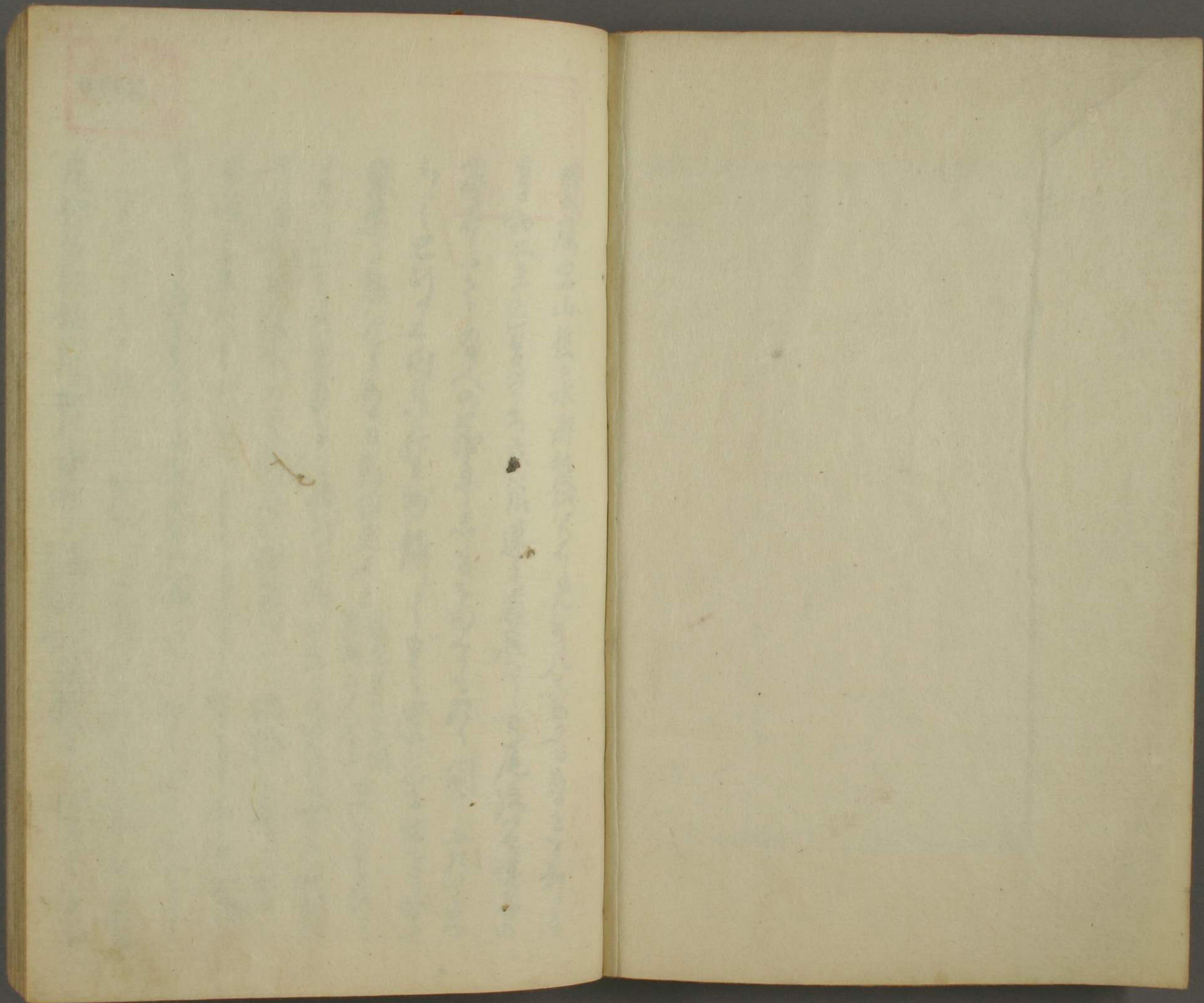
稿本全

特別

21

3310





特

門 へ 21
號 3310
卷

龍澤文庫



明の鴈宕山樵水滸後傳なり是の書のありとを知りて
 享和二年の夏のころ京路遠く遊歴せり日尾張名護屋の
 旅亭ありある人の花事とてさうさうもゆく閑しありあり
 らく思ひてを回目とせし抄録しゆく世に傳へしは
 浪連子起りたる日馬田老人と（医生名は昌潤
長崎の人なり）めのかきしり
 二言のつみまゝの書ありし及び馬田老人のいひける水滸後
 傳は二本ありてその天竺公府の他はつるの故郷を去り一時二
 本ありたりとて謄抄しゆくは馬田老人のいひける書に
 あらざるもの書名も知しるの稀なり物にひらきしるは
 けりしをより二十餘年と改めし文政十年のまゝなりは
 友何勢松板好の由あり（厚村氏浪連子とひひくるは
馬田氏）

かの唐字山樵の水滸後傳を購ひてけりいづれも本がわづなれを
印字に磨滅少くして且改刻なく全きもの巻々もありなを
本の儒生山樵翁の原筆に日本ありと云ふ一冊は馬島秋田
翁を介して借得て校讎を補筆せしめおひき毎字を
うらやみ物とれた唐法の體を修復しけり知本せし
くも家に入す書よなるべしと云ふのあり校刻の後いづれ
ぬく郵附なく解しんべしと云ふはれはなうよぬきを
うらやみ文遊の情をなやむ湯くいつともあつた似
つらうと云ふいづれへいづれに復しぬる己丑のく水滸
後傳船本らまふしむのあつたまふしむあもせなる尚古堂
の書のあつたまふしむと購ひてやと云ふを求めつるはよ
買果て

るいづれを迅速の書肆よりいづれもくぬくはあつた
ぬれり價もいづれのほまふけりやと云ふ繕ひて閱せし
借の乾隆のく五針茶本と云ふの再評翻刻したるを
誤り字謬刻よりあつたの原本やうけれも幸ひあり
ゆのあつたのなれり原本のく校訂せしめしめ
うらやみの著述よりあつたのく校訂せしめしめ
その下向よりあつたの著書の筆をとりぬるもあつた校
訂の点裁よりあつたの校訂果あつたかき料の原
本をぬる返さんと云ふはかきしめぬるもいづれを
うらやみしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめ
つらうと云ふいづれへいづれに復しぬる己丑のく水滸
後傳船本らまふしむのあつたまふしむあもせなる尚古堂
の書のあつたまふしむと購ひてやと云ふを求めつるはよ
買果て

かの馬田氏のえんを

いふは天竺の水滸後傳のついでに、
くまのくまのりかるといふを、
ついでに、天竺のついでに、
釋史のついでに、
後傳のついでに、
みらるる。

天保二年辛卯の夏四月廿五日、
燈下談

水滸後傳批評半周憲談

水滸後傳八卷、重訂本の厚く、回目四十回、毎卷四回、古宋

遺民著、雁宕山樵評とあり、明の萬曆戊申の秋、戊申ハ二十六年ハ

丁丑ハ雁宕山樵が自序、並ハ古宋遺民の偽序、共ニ二編あり、然

るを清の葵永昇が再評翻刻の新本あり、件の二序を削る、

自己の序をのり、所載れが、そう原本用鑄の、歲月竟子派

滅く、世傳を、いつと、惜む、とや、且葵永昇が

重訂本あり、件の雁宕山樵が自評と、葵永昇評を削る、その

巻毎に録署く、古宋遺民雁宕山樵編輯、金陵憨客野

雲主人評定とあり、葵永昇文字元放、古宋遺民の偽稱あり、其の書

雁宕山樵が、自心あると疑ひ、其を、知る、といふ、第三

五の回目、日本國興兵構譽と一段、関白一萬の兵を率、暹羅國を木子俊と戦ふあり、其の関白ハ豊太周の朝鮮攻より唐山を侵す、守位おん、宋元の時、いつ、日本國の元帥の関白より、之を知る、これら、推量、古宋の遺民ハ偽稱、明板原本の簡端の總評、遺民不知何許人、以時考之、當去施羅之世、味遠或與之同時、不相為下、亦未可知、元人以填詞小説、為其當時風氣也、此といふ、其の評の落款、樵餘偶識とあり、則是、雁宕山樵、自評、樵、則雁宕山樵、かゝる、文人もの、さう、つゝ、偽り、これ、其の限る、あ、れ、と、則、傳、金、瑞、が、施、耐、菴、の、序、を、偽、作、ま、す、舊、稿、は、做、ひ、ま、ん、雅、み、の、國、の、人、を、欺、以、ゆ、る、も、つ、り、か、く、皇、國、人、を、欺、は、ゆ、か、ら、う、の、ま、言、ハ、三、人、の、童、子、も、知、る、べ、し、其、示、是、が、重、訂、本、ま、の、總、評、を、削、り、去、り、し、

さう、あ、り、ま、す、似、れ、れ、が、も、遠、民、と、山、樵、を、雷、同、く、古、宋、遺、民、雁、宕、山、樵、編、輯、と、い、つ、せ、ん、五、十、步、を、も、つ、百、步、を、大、と、い、ふ、下、を、い、ふ、似、ま、り、遠、民、ハ、山、樵、が、人、を、欺、く、偽、稱、あ、れ、も、萬、曆、中、の、人、は、宋、元、を、相、去、る、と、既、み、し、と、遠、く、これ、を、古、宋、の、遺、民、と、い、つ、言、許、成、の、が、相、る、と、い、ふ、あ、も、笑、ふ、べ、し、ま、あ、ら、ま、や、評、一、此、の、水、許、後、傳、の、大、意、ハ、混、江、龍、木、子、俊、が、暹、羅、國、へ、推、派、し、る、か、こ、の、逆、臣、共、藩、薩、頭、危、と、討、滅、し、て、彼、國、王、を、殺、し、時、天、罡、地、煞、族、類、の、三、十、餘、人、良、伴、と、る、く、俱、ま、さ、さ、え、し、し、を、作、れ、り、あ、れ、は、も、初、め、か、ら、ひ、し、木、子、俊、が、暹、羅、の、王、を、殺、す、る、の、物、を、い、ふ、唐、長、の、年、山、田、仁、在、る、暹、羅、子、也、は、重、任、せ、れ、遂、に、大、國、を、領、す、る、の、事、ハ、暹、羅、志、の、事、ハ、是、を、い、ふ、當、時、唐、山、田、仁、也、と、い、ふ、唐、山、の、高、旅、常、日、暹、羅、に、到、り、て、暹、羅、志、を、撮、合、し、て、後、

傳は云々と他りしるべしと云ふも心づかぬは物事さしやせし今又
つらつらおひみよふかの山田仁左衛門が暹羅王を重用せられた大國を領せ
し。天朝寛永十年のころ又山樵が水滸後傳を他りし。明の
萬曆二十六年の秋るはれが。天朝慶長十二年丁未の
あつ既に仁左衛門暹羅を起したるころもかたが重用せられた寛
永中のとあるを水滸後傳は撮合せしむるは。ん。とあるは古宋遺
民の偽稱の如く件の雁宕山樵も明人なりあつて清の康熙の年を
いふ他りし。たつては。ゆめさんとき萬曆中の著書なりとも知るべし
と疑ひおひしともあつて。今又おもふは。後傳の原本の筆は
書体彫刻の精妙なる。是明板なり。あつて乾隆の重訂本は比
ま。實は雲壤の差別あり。當今細工の疎自なる。和漢一般の時

勢よりいへ仕入本と唱ふものあり。たつては。元の原本の稱書なり
序目と評し寫させ置かれ異日又同好の友より書とやと之を評し
後傳の作者の大意は前傳する百八人の好漢等忠義の志あるを志
終りせしむる。ゆめさんとき。看官飽ぬ心地をなれば。その殘燼を引起し
かみ。ゆめさん。他りし。ま。ゆめさん。天罡地煞の好漢等。あつて終を
よせ。ゆめさん。前傳作者の本意は。その辨論の下よ。し。衆人
人々の心とあらう。見と。その殘燼を引起し。後傳の他ありとも。李俊
とも。摠大将。ゆるせ。ゆめさん。ゆめさん。の故。ゆめさん。の略評は。李俊の宋江は
孝順厚う。ゆめさん。ゆめさん。ゆめさん。の故。ゆめさん。の略評は。李俊の宋江は
世貫保。ゆめさん。ゆめさん。ゆめさん。の故。ゆめさん。の略評は。李俊の宋江は
彼に。五湖。做。ゆめさん。ゆめさん。ゆめさん。の故。ゆめさん。の略評は。李俊の宋江は

ど。ゆ。と暹羅の國王なり。自餘の三十一人と。其臣下はあり。快らぬ傳はる
之。彼國王はる。暹羅の。柴進をどてめゆらうかめ。あの人略なれども。周の天
子の後裔なり。當時貴族と稱せし。そのの。危難を免れし
財を惜まじ。林冲武松宋江等。多し。みなその。危難を免れし
る。もあれが。と郵書の内は。いかにこれら。李俊。の論辨。ま。あ。氣
愚意と暗合。但。の氏族の。卑。云。と。則
皇國の。異。知の。千。柴進。暹羅。宰相。は
る。れば。後傳の。作者の。亦。その。用。い。る。た。あ。の。を。思。意。は。任
まれ。暹羅の。王。も。へ。の。本。傳。は。三人。あり。の。第一。宋。安。平。を
る。の。安。平。の。宋。清。の。子。宋。江。の。怪。心。其。の。傳。を。支。ぬ。と。あ。ら。ん。を。必
し。と。あり。宋。江。生。涯。取。れ。が。嗣。の。あ。ら。ば。と。勿。論。ん。第。宋。清。の。兩。個。の

見コトモはあり。氣ウレヒ子を宋安平といひ。その次を其ナシと。宋江世あり。時。又宋太公の
願コトモひより。宋安平を美食の嗣と。宋江の本意を。ね。又の情願辞
ま。よ。す。且。後。を。不。考。と。は。い。ふ。經。文。も。あ。る。れ。ば。遂。に。其。の。意。を。任。せ。し。や。と
い。ふ。趣。の。終。り。の。り。と。て。安。平。が。人。を。取。り。文。武。兩。方。が。才。と。す。竟。は。異。邦。の。君
なる。徳。ある。の。の。他。を。被。拜。臣。の。茶。鶴。や。れ。て。半。世。の。忠。義。画。餅。あ。る。か。
宋江が為子寛を伸る。是。一。大。の。段。也。看。官。指。掌。呼。喚。を。和。漢。一。致。の
快。き。人。を。後。傳。の。作。者。の。を。い。ふ。新。宋。安。平。と。文。弱。は。用。の。人。も。志
と。る。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。も。あ。れ。其。の。評。は。宋。安。平。を。用。の。前。傳。は。宋。清。の
文。弱。の。諸。生。也。可。も。亦。不。可。也。あ。ら。う。の。作。者。の。用。心。を。宋。江。を。才
あり。徳。あり。百。八。人。の。頭。領。と。れ。ば。必。ず。を。爲。す。宋。清。を。か。の。ど。く。は。作。る。せ。が。
其。の。才。又。の。真。し。に。後。傳。を。ま。す。と。宋。清。の。子。なり。と。才。子。俊。傑。を。ん。

又云前傳より宋江毒殺せられ、後花逢春の異用と傳ふ其意全上より宋江と終れ終れ死にたり宋江より兄弟より又誰かこれ及べんやれが子の花逢春と暹羅國の王とせば前世の果報ありんかこの文より用ひ可任なりとのありや他はありやいふは後傳藏録の好漢とす後漢にあるべしめはありや

辟言の鐵斗子乘和の王たるは性伶俐と云ふも前傳ありし能あるはの後傳よりする所の智恵異用と伯仲をこの文を以推せたり宋清も亦後傳中一廉の役と著けり其の子宋安安平の石のより暹羅の王なるともも前傳と觀觀と之なるも傳ふよりゆかりありしかりもなるもたゞるるも後傳の傳ふよりゆかりのみ宋江兄弟は傳より伯世ありし趣向を知りし解言ありし也評三又その次に暹羅國の王なるもたゞるも花逢春よりゆかり地の小李廣花逢春の子花逢春の箭前の達人なり原是宋の知寨之已をゆかり梁山泊は落草するものもみづる旅客と趕勢する物よりするもゆかりなり状より受教ありや看官は嬉しがるもの子花逢春も亦家業を美嗣は射藝は妙あり暹羅の公主は眷恋せしなりや駙馬より

か木子後ハカレを媒鳥と云ふ。竟は大柴をるせん。かの時木子俊は譲りて花逢春と王とせば暹羅王の血統と云ふ。あれは宋江の本意は稱ふよりあれは木子俊はよく大義士なり。みづる王はよく勝り。勿論暹羅の物よりあり。王馬寶真の爲もせむ。木子俊は三十餘人の爲も。彼設けしるなり。馬寶真は後漢の名將。馬援は後裔なるなり。あれは子の花逢春は王位と嗣して。木子俊は良法と好とも。取らざるも。後傳の作者はこれを木子俊はよく王より世々慕ふと。旨とす。後漢は其の教も所。まづこの世と稱ふ。稱ふはあり。評四既より上よりあつたのみ。宋安安平も花逢春の。日暹羅王なるも。稱ひあふ浪子燕主日あり。燕主日あり。盧俊義の家僕なり。出れ賤し。かけれども。その忠義は後漢人。且その智恵の廣大なるも。異用がたけ計を

勢を以て林冲を囑賂せしむる王倫を前傳あり李子卿々々便りく徽宗帝不
殺を以てするを直に奸計あり。招安の御書之賜り遂に呼保義宋江が宿願を果せし。その
功も亦後輩人又後傳あり。金宮子とてたゞ徽宗帝子を見し。柑子
青子とておつ。御筆の便直と賜り人の及ぶ所あり。忠を以て
忠を以てする。又忠を以てする。千金を謂連し。國圖の内は盧安人
母を贖ひし。件々事々しむる。忠を以てする。二十名幾
餘の母護。孰も燕青子及ぶ。かれがその後傳あり。燕青とて暹羅國の
王なるもけし。あむをかくて人の意表し出。他はあむもあむ。後
傳の傳者としての意味は心つぬ。あむ不命。暹羅國の位階の段。燕青の
第一階公孫勝。第二階宰相。小あり。李俊不勝。とて知む。李俊の
第三階太子少師燕青。李俊の機とて。禍を避。とてあむ。且梁山泊。水軍一。頭

領あり。遂に異國推渡。摠大将不立。暹羅國に赴けり。衆兄弟先をせ。
の先入の功あり。英状の王にあり。評五

蔡皇が總評の第四云。本傳雖是承接前傳而作然然
有勝似前傳處。如前傳所寫殺人之事。固有當其罪者。
亦有無辜枉死人。人可憐者。如秦明之家眷。尾官寺之
老僧。雖非手刃。然正如王道所云。我雖不殺伯仁。伯仁由
我而死。用事者不得辭其過也。又如扈家庄。已是通和。扈
成又將祝魁解來。却將他全家殺死。至于朱仝之小衙內。
更是可憐。又如魚目達之在李忠寨內。擄而逃。若秀之燒
燒祝家庄。俱為不滿人意。本傳寫所殺人或是害民。或
誤國。為公議所不容。其小者亦是與山泊諸人。不是當

仇^{ナラ}即^チ是^レ新^ニ恨^ミ。素^レ懷^キ怨^ミ隙^ヲ。明^ニ作^ル對^シ頭^ヲ。且^ニ俱^ニ各^レ有^ル。應^ニ死^ス之^レ處^ニ。擡^テ之^レ天^ノ理^ヲ。人^ノ情^ヲ。必^ズ須^ク殺^ス之^レ。而^{シテ}後^ニ快^ク者^{ナリ}。這^レ亦^チ殺^シ得^ル。并^ニ無^ク遺^レ憾^{ナリ}。方^ニ是^レ真^ニ氣^ヲ傑^ク。寧^シ動^ス。不^レ是^レ殘^ニ毒^{ナリ}。不^レ是^レ孟^ノ浪^ノ比^ト。前^ノ傳^ニ為^シ更^ニ強^ク也^{ナリ}。と^テ。理^ヲの^レ。似^レれ^ルも。あれ^レの^レ水^ノ滸^ノの^レ皮^ノ肉^ヲと^テ。骨^ノ髓^ヲを^レ知^ル。ゆ^レの^レ。抑^テ水^ノ滸^ノ傳^ニ子^ノ之^レ等^ノの^レ深^ク意^ヲ。宋^ノ江^ノを^レ下^ル。と^テ。百^ノ八^ノ名^ノの^レ好^ム漢^ヲ。初^ニ各^レ々^ニ生^リ出^ス。其^ノ身^ノく^レ古^ノ又^レあ^リま^らず^レ。み^る一^ノ般^ノの^レ善^ム人^ノ。既^レ不^レ古^ノ又^レあ^リま^らず^レ。梁^ノ山^ノ泊^ニ落^シ草^ヲせ^りゆ^レれ^ル。文^ノ弱^ク有^ルも^レ。奸^ノ智^ノ殘^ニ忍^ミ。勇^ノ悍^ク有^ルも^レ。不^レ仁^ニ異^ニ行^フ。一^ノ箇^ノの^レ惡^ム魔^ノ鬼^ノ。似^レか^らる^ル。便^ニ是^レ石^ノ碣^{ナリ}。魔^ノ君^ノを^レ走^ル。應^ニ報^ス縁^ヲの^レ。宋^ノ江^ノの^レ。魔^ノ鬼^ノの^レ。又^レの^レ。天^ノ行^ノ道^ノ。皆^チ是^レ魔^ノ鬼^ノの^レ誇^ク言^フ。心^ノの^レ信^ヲ。石^ノ碣^ノ天^ノ降^ル。か^らる^ル。

過^シ世^ノ業^ノ因^ヲ。解^シ脱^スせ^り。其^ノ面目^ヲと^テ改^メ。忠^ノ臣^ノ義^ノ士^ノ。か^らる^ル。八^ノ人^ノ。初^ニ善^ム中^ノ惡^ム。後^ニ思^フの^レ。三^ノ等^ノあり^し。水^ノ滸^ノを^レ。其^ノの^レ深^ク意^ヲ。人^ノ分^ヲ明^ク。其^ノの^レ。識^ルもの^ノ。悟^ル。か^らる^ル。金^ノ瑞^ノ。醒^め。漫^ニ水^ノ滸^ノを^レ評^ス。ふ^レ。當^レ田^ノら^る。又^レ只^ニ金^ノ瑞^ノ。吳^ノ。批^シ評^ス。後^ニ傳^ノの^レ。亦^チ。其^ノ明^ノの^レ。醒^め。推^ス。前^ニ傳^ノの^レ。石^ノ碣^ノ。宋^ノ江^ノ。百^ノ八^ノ人^ノ。清^ク淨^ニ。其^ノの^レ。宋^ノ朝^ノの^レ。爲^シ。其^ノの^レ。後^ニ傳^ノの^レ。亦^チ。二人^ノの^レ。好^ム漢^ヲ。亦^チ同^ク。不^レ臣^ノの^レ。心^ヲを^レ起^ス。其^ノの^レ。又^レ。登^ル雲^ノ。飲^ム馬^ノ。山^ノ川^ノ。二^ノ个^ノ所^ニ。又^レ。山^ノ寨^ヲを^レ相^ノ構^ム。強^ク。又^レ。

官軍を撃ち退けり。勲々宋朝を盾と突たる。これらの趣向は前後は真面目と抹却して蛇足の為と思ふ。然るに評定より前傳は勝るとあり。はうらむ証言も本に應縁立阮小七等。忠忠を結び夥を聚めり。ぬらび賊の頭領はする。罪も名もあらぬ。殺さる物をのこさるや。と嗚呼をうたふ。あれど。前傳は百八人。初善中惡後忠の二等あり。夜夜明せん。只是愚者の一得あり。古人未夜夜の明評あり。四羅貫耐甚ある。白王國はまある。ありとも。かきまを後受ぬれが。那金瑞若。石碣收を收る。終るといひ。諺語あり。七十回ハ全書よむ。又宋江等。前傳は死する。四十許人。竟に後受ある。みる。奸臣は信れらる。果敢多く枉死する。中。さる魔物の思報あり。亦是勸善懲惡の。此等の用意あり。

宋江等百八人忠義の書。一賞をゆも。過半王車は死にれども。舊悪竟に消滅。忠信義烈は名する。世々看官は惜まら。前傳作者の本意。先づこの意を會得。さう後傳を他へ。前後の傳を評すべし。評六

の人との批評を。予はしける。翁の評論あり。さる府儒の迂談なり。宋江等百八人忠義を旨と。賞をゆも。過半枉死せし。ゆ。さる勸懲を正しく。前傳此等の本意あり。蔡京童貫高俅。高俅等の奸臣も。必す誅せられ。傳は勸懲を正しく。さる前傳は。ある。か。さる後傳は。奸臣を。誦罰せられ。且蔡京童貫高俅等の。梁山殘餘の奸漢等。某等せられ。非命なり。便是前後の傳の。舊意と報ふ大趣向。か。さる。勸懲不遺漏。さるべし。梁山一百

八人よのこ。その昔唐の應報あり。飛奸臣等よまのるる。便是前傳の
作者の脱落ヌカリとのりまのこ。かても深意あるや。同じか。おのれ若くはひきまら
水滸の皮肉せのこ。又つもの足下は限らざ。さゆ疑ひの人みなあべし。抑蔡
京童貫高俅楊戩等の奸臣等。皆是宋書に載らんと。宋枯賞
四訓分明ると。讀書の人ハみるや。知らず。あまのこ。前傳は他カシをひく
罪せれし。趣まを字まぬ。水滸のまやう。宋朝の奸臣の為に作らざ。
百八人の奸漢はるの列傳あれが勸懲也。百八人のうへあり。彼蔡京高
俅也。竟に終りをよせせけりし。高俅ハ徽宗北遊の時。沙漠へまの吉又の趣ハ宋
史に譲りて字まぬ。迺作者の俗るらば。亦是一大趣向へ。今世間の
草紙の如く。さく婦幼はえせんとも。仰らうと會得せ。その疑ひ
氷解也。され又後傳は。飛奸臣等が誦罰の趣を字まら。人

意を快くせし書と讀み。い為るれが。あれも亦あり。ねと。前傳と後
傳の作者の腹内うへえ。合せらるのいとまあり。まの故は後傳の前
傳の本つた。迷オチを拾ひ足らばと補ひ。趣向と承接も似れも。水
油とまへ。如く用心まて。あか。まをのつた。おひみれが。初善中惡後
忠の。まを。あを。知らば。故に。か。山樵。後傳は。又。一書と。う。た。よ
けれ。ま。前傳と。兄弟。ま。ま。ゆ。ま。用心各異。然れ。評七
あ。人。又。公。羽の。評。解。實。ま。ま。あ。れ。ず。飲。馬。川。へ。向。れ。ま。一。隊。の。軍。兵。を。と。
童貫の指揮は。れ。ま。か。れ。が。官。軍。と。稱。ま。の。名。の。こ。ま。且。討。の。大。將。后。
李。良。嗣。郭。京。の。頼。の。小。人。也。本。應。が。これと。戦。ま。走。せ。ま。と。
て。天子。本。道。と。突。ぐ。あ。の。こ。この。ま。の。い。つ。つ。と。同。れ。ま。お。れ。又。ま。け。ま。飲。馬
へ。討。の。軍。兵。を。童。貫。の。指揮。ま。の。ま。也。他。兵。權。を。ま。天子。ま。ま。同。免。

赴れり。囚れり獄に繋れり。彰徳府へ配刺せり。時楊林と相共。馮舎人
并に潘婦玉娥を殺し。逃去り。東人李應子隨從し。登雲山の巽入
り。後々の名をも出され。最後暹羅國の功臣位階の段。杜真の公
孫勝より下。第四十位あり。驛傳俱兼都統制武毅將軍と見え
たり。抑後傳殘剩の好漢三十二人。一人はあれを前傳百八人。比どかま
いとせど。危大嫂杜真の。前傳より看官より。知れり。あれが。後傳
中も後々まで。わらう。後をうけつ。ゆき。後傳の作者の字ぶると思
惟り。二十餘人の好漢を。不幸あり。中難劇の俳優る。心後
不足とら。めあ。ん。呵。評十

ふ。先玉娥が。杜真の情を寄せり。支成ら。り。潘金蓮の故態と字せん。
か。杜真が。玉娥と馮舎人七殺を段。林冲が。草料場と。武松が。嫂を殺し。

兄の爲に心を雪ぐ。舊稿と字せん。毎回事々物々。かのかく。前傳の故態を
寫し。相傳り。同か。か。茶屋が。評より。はめ。れ。を。飾。辭。あり。
さ。趣。向。る。ま。な。行。前。傳。の。境。を。離。れ。新。奇。と。出。さ。り。あ。い。と。さ。
し。杜。真。が。鞆。蹄。と。鬼。臉。見。と。う。鬼。臉。見。の。間。の。俗。の。見。と。權。を。左。右。を
小。指。の。口。を。推。廣。け。又。食。指。を。眼。を。推。下。周。ら。べ。と。の。下。と。あ。と。相
同。鬼。臉。見。の。う。猶。園。第。十。五。卷。妖。魅。一。は。ん。さ。り。杜。真。が。相。貌。べ。と。う。似。こ
れ。の。鞆。蹄。と。肩。を。る。ん。や。玉。娥。の。潘。婦。を。う。も。か。醜。郎。は。春。想。せ。る。事。の
缺。る。亦。あ。い。と。さ。つ。そ。子。又。ひ。と。ち。り。ん。前。傳。の。阮。小。五。が。鞆。蹄。と。短。命
二。郎。と。い。ふ。の。短。命。と。字。の。如。く。は。讀。て。い。ま。ぬ。る。と。難。い。る。の。ん。と。命。短。し
と。い。鞆。蹄。と。肩。を。る。ん。必。然。と。い。ふ。の。短。命。ハ。命。の。短。い。と。い。ふ。と。い。れ。を
此。同。の。俗。語。を。譯。せ。命。と。い。め。と。い。ふ。あ。る。今。も。美。婦。の。三。の。い。れ。ぬ。を。思。言。

命をめとらば知るべし。短命の譚ハ水滸解事又云々。この鯨号す。杜典が
醜事あり。阮小五が殺生好き。思想像すべし。又阮小二が鯨号と立地太歳と
り。この太歳ハ歳徳星君の大歳方にあふ。唐山少く太歳と名つくる。一
種の怪物あり。その大斗のどろろ肉毛あり。田圃をよみ土中を在ると。人を知
く掘起せば。蟻々々々動くとす。人のこれを犯せば。立地太歳と名つくる。棒
示段の林東とす。この件ハ太歳を掘り。京で咬んとす。立地太歳死す。
り。秋燈叢話巻之四よ見え。阮小二が粗暴なる。辟言ハ太歳如く人
の毛を犯せば。立地太歳と名つくる。立地太歳と鯨号す。この鯨号
百八人の鯨号す。思考あれども。あつて千々。あるが替りせむ。をハ又別よ
み。許十一

混世魔王樊瑞の事の錯謬も。公孫勝を引出せ。趣向ハ巧くあり。公孫

勝ハ前傳あり。役なり。只軍陣に臨み。風を掃くと。魔法と降をのこり。
これハ宋江此下。第四位あり。この唐山少く。儒者は要す。道教を推す。
故ハ宋用の次第とす。原是方外の人あれば。位階のゆは。相心かぬ。似
地ハ深山幽谷とす。浮世を厭ふの中あれば。好漢とす。共信ハ暹羅国に赴く。
身と指くぬ。ぬべら。李應。宋廷玉とす。俱ハ異邦に赴き。残餘の
數ハ元人の。前傳ハ他者の為あり。却て本意なる。許十二
樂和ハ身の上を求め。權且京師の弟子とす。建康なる王宣慶の
府中あり。後ハ花媚の毒。秦耀の毒。花逢春等と極む。せん。伏
線あり。樂和の人柄あり。相心かぬ。趣向ハ伏線ハ巧拙あり。高ハ伏
線ハ看官に心づれど。方他の伏線ハ待機と知らむ。後傳ハ拙ハ伏線
三傳あり。この段ハ樂和ハこのひととす。許十三

郭京が建康へ赴く。道中なる旅舎あり。汪五狗がぬるところ鶏を。俛よりち咬ひり。時更に祝家の故態に只福の甚しかり。又郭京が豊楽堡なる錢老が。宿り所。主命の女兒の妖怪は。却て妖怪は。始より郭京の醜態を字を為す。錢員外の女兒の爲に作。設する。其の女の美しかり。但見あり。且その妖怪の言。郭京を懲む時。妖怪の言。我。是北幽王太子。與你女兒有天緣之分。故來相聘する。郭京が逃去り。後一道德の法カあり。その物性竟に退治せしむ。いふ又の終りて一終り。おの錢員外の女兒の事と。蔣敬の水厄を極む。小茅菴の老僧淡然。一部の物。人のるは落着ある。惜む。作者の脱筆。評十四

木子俊が標細。梁山泊に到り。宋江は對面し。且童子が。前北なる論あり。梁山。百八人の所云。家嫌。縦から祥瑞あり。身風。異。邦へ推渡り。且その内乱を治め。王あり。作者の腹内を推量。るは木子俊の前。天罡三十六員の内。第一の人物と。初は。祥瑞。看官の心地。木子俊の死。宋江の。木子俊は。宋江の。木子俊は。宋江の。

第一回内の
 詩句は探
 林豪俊管
 識名話到
 人情劍欲
 鳴とて詩
 句ありき
 第九回と
 見か下の
 増補と
 第九回の
 増補と
 易さる目
 句に再出
 りふおや
 不用の増
 補心

又之鯨人
 くらけと
 食とこれ
 こは魚と
 他魚の
 食とこれ
 蓋蘇乳
 中より
 奇魚と
 後傳の
 杖標か
 堪ふ

人情劍欲鳴これん明板の原本第八回の末の段樂和と童威と料を環
 會ひのしを談話と設け九回とて初段とて李俊の始末と云
 と云つたわうとて童威樂和等あつたをうま及べん終ると童威訂本
 第九回の初段と童威と樂和と先のすの物とをせとて李俊の再結
 句とてのすのちを後と倍とて蘇と棒とせやうめはの畢竟原
 本文第十回とあり物とと第九回の初段と引あがのまのり相同とあり
 海子茶屋が第十回の惣評と前同樂和遇童威後童威叙李俊
 始末中間若干事跡娓娓四五回入此回只用二筆便輕
 輕掉轉接得毫不費筆力只如一氣呵成全無扭捏索挽痕跡
 此等筆力豈尋常稗乘家所能とらるる筆削する能
 賞を不むるわうといふ原本とて世にあらはれぬと後述する評説

と云ふ一評十七

花逢春が海船内あり鯨を射る光景ハ亡父花菜の故態と写せし親の子
 るれがゆめありと云ふれども鳴雁の優美なるあ及ぶその時鯨の腹内ハ二三
 筋の癩頭元鬼ありといふ消死せらるるあり其れ謬説也唐山の文人
 云く海錯のり疎る鯨ハ只鯨を食餌とて他魚の口中へ入るれば
 みる潮吹を敷り吹出るといふは二三筋なる癩頭元鬼を呑むとあるや笑ふ
 べしその後花逢春自ら日進羅國やその射を執るとありハハハハと云ふ
 けをあり燕三首も又と云うられ前後とてあれがけけ評十八
 李俊が金敷鬼嶋とて守りての勢かひも棄てて日進羅國の城下を攻め遂に和
 議成りて退けし金敷鬼嶋と守るまの物々ありとて尋常なる而も此
 るえと云うるかくく神醫安道全が高麗王を療治をせれ徽宗の勅命より

宋江が反詩を題し、そのとき唐の黃巢ワザ果てするに及ぶが、その本意は、皆を魔教の所爲ワザなり。當初宋江が、非若輩の七人の必死を移し、梁山泊へ居つるが、より以來忠を尊ぶる石碣降り。招安ありて、みなこれ魔教あり。よの故不コト言、仁義忠信を説くも、道は極なりありあり。その時濟陽橋の壁に反詩を題し、或は朱明の妻子を、陥れしとて、或は朱全忠を山寨へ引入れし、異用と計り、李逵を小折肉を殺させ、或は盧俊義を引入れし。計りて罪を陥れ、後よ極なり。とて、宋江は、宋江は、かくの如く、餘のものも、火を食ふ人を殺し、物も奪ひし。みなを魔界の悪行なれ。宋江は、拜りし、朝廷に旅ひし、連りし招安を願ひし、その本心を、水滸傳を記し、故に四羅賈中へ水滸傳を傳へし、密報あり、孫三世啞ありし、その本心を、通考かて

管文獻通考かて

宋江は、その百八人、魔教既し消滅し、其の忠臣あり、後、その逆を、拾ん為し、後傳の作ありし、濟陽橋に反詩を題し、其の舊の魔界より、を悲しと又照意コトなり故に、前傳の作ありし、稱ふも、ありし、西遊記の如く、けあらぬをべし。之は法師か、孫悟空の諫をを用ひ、却て地を逐退けし、仙は、障礙する。魔王の爲に魅せられ、その本心を、表ひ故に、宋江に、その意も、合はぬ人の、家眷良友の諫をを用ひ、勢ひ、集り、悪魔と事と、後傳に、悔く、その、みるを、魔教の教を、所、なれ、憤ら、その、や、これの、徳言コトに、かく、措き、して、將教に、濟陽橋を、料ら、穆春は、再會志つる、その、那陸祥、張徳の、宿所を、や、興出、穆春は、遂に、將教と、俱し、その、如く、到る、張徳は、既に、陸祥を、殺され、張徳の、妻を、殺し、陸祥と、空通志つる、もの、なれ、其、か、ま、や、あり、け、を、穆春は、其、責を、懲り、し、悪き、又、を、選る、白狀致させ、かく、這

暢快得隊系。
只足與張德
報了仇のちのち
多いばはかたじけ
なげでうらやま
のこの立中ふや
ひの俗語は引
あてふちよふか
よくのん水持
御舞の点のす
るのめいふの

淫婦を殺し。又陸祥を殺し。將教が本尊取れる。許多の銀子をとり
復し。暢快得隊系。只是與張德報了仇。張德
陸祥の二賊と一箇にえや。同士の敵とせせり。却るの妻を殺し。張德が為
仇と報ひとり。とてのむのけり。穆春の粗人なり。素より遠慮ある
れめられ。當坐は淫婦と陸祥を殺し。將教の文字あり。且思慮あるめ
る。いづれが淫婦と陸祥を生拘り。よと知縣に訴げけん。その脱路は
と作者の正し。ばも又脱路して。その張德が綽號は雪裏蛆や。陸祥が
綽號は癩頭元龜といひ。雪裏蛆は峨眉山る雪の中。生出る雪蛆。大サ大
指の如く。咬めるものあり。草木子小足さ。本邦あり。越後あり。雪中生
はる虫あり。これ亦雪蛆の類。細小波の如く。大なるものあり。とてゆふ。又癩頭
元龜ハ上りえ。和名海坊主。この二賊の綽號は山海の奇物とて合せ。作者の

洒落るべ。か。將教穆春の。い。人。を。殺。す。の。後。他。の。海。賊。を。と。
殺。す。も。罪。あり。と。もの。や。あれ。も。澄。と。る。始。末。い。ち。穆。春。の。賭。銭。の。
為。に。家。質。は。れ。る。庄。園。家。宅。を。け。い。と。い。ふ。將。教。は。銀。子。を。借。り。財。主
の。悪。棍。天。狗。星。排。環。の。宿。所。は。越。後。の。排。環。計。り。賭。事。を。せ。り。穆。春。が
も。と。する。銀。子。を。掠。り。か。穆。春。は。り。は。堪。が。り。排。環。と。園。宅。の。男。女。一。人。も。偏。さ。せ
破。殺。し。將。教。と。俱。に。逃。去。り。登。雲。山。る。乘。廷。玉。孫。立。宮。の。野。子。入。ん。と。い。
お。道。中。將。教。猛。は。病。柯。ま。り。く。い。づ。も。ま。る。な。けれ。ば。雙。峰。山。神。の。廟。内。に
宿。を。投。ぎ。將。自。づ。折。焦。若。仙。表。愛。泉。世。大。立。と。い。ふ。三。虎。の。悪。棍。這。廟。
裏。に。あり。余。り。せ。大。立。が。雞。サ。サ。サ。昔。哥。と。い。ふ。少。主。が。穆。春。を。認。り。あり。
又。遂。に。他。を。知。れ。り。穆。春。が。茶。を。買。ん。と。外。に。出。る。間。に。將。教。ハ。擲。捕
られ。穆。春。も。危。う。と。か。の。芳。哥。と。廟。守。の。老。僧。の。内。通。より。穆。春。却。り

件の愚棍。焦道士。袁安泉。竺大立。并子朱元等と鹿金を為体。武松が
鴛鴦樓の趣。似れども別れども。又そそと勇ましく。且華やかしくあり。
蔣敬入の鴛鴦たれ。病者早に癒はれ。四人かき立。登雲山へ赴き。俗は
世話場とよまされ。九本の回^{十六}。故意前傳の趣は應照せしとあり。自然は
似るれあつた。いかにあり。評二十

この時登雲山の寨あり。官軍の大將鄧瓊。二千の兵馬を領て登。青。葉の
都統制と傳は推しをま。日夜攻撃し。同あり。只青州の都統制
黄信^{鎮之}の病は推け。いかに官軍は加。浩は蔣敬穆春の兩
人。登雲山の寨はまはしければ。則ち扈成の計策はま。蔣敬之偽黄^二
信あり。穆春とや三四百名の雜兵を従り。寄りの陣へ遣し。合戦の
時裏代とせむ。大將鄧瓊を馬に捕り。寄りの士卒と鹿金をま。是も亦

前傳も宋江が美朱明と降をよ。偽表朱明と作り出せ。計略と相似る。只あるは
差別あり。扈成は後傳はま。智の増やと。吳用と伯仲を。衛尚あり朱
廷玉は説着あり。夥計を引入れ。今又偽黄信と造作し。よく大敵を
たらしむ。樂和と扈成の才学をあらわ。樂和扈成をあ。そを用と用ひ
は。いかに亦怪むべし。評二十一

扈成の計略はよく。黄信の奸臣を疑は。罪をなす折。登雲山の寨より。
扈成は蔣敬を遣し。黄信は説着あり。身方を引入れ。みる前傳の舊
稿あり。いかに孫立。安道全。蕭讓。余大聖の為。安道全。并蕭金二人此
穆春と聞煥章の宿所へ遣し。いかに家眷を迎し。折。聞煥章あり。いかに見
聞小姐の。就む。愚棍焦百鬼と連公使をま。いかに福を避んと。蕭金の
家眷と共に聞小姐を。登雲山の寨へと頼遣し。いかに焦百鬼の証言といひん

とき。東京へ赴く程子。穆春の逢ふ。焦面鬼を見参り。殺し。野中の井へ
沈め。聞煙音の知りて。東京子逗留し。焦面鬼を待たれ。他が告
訴のするに。ちよ登雲山に赴けり。竟るの隊に参り。みるに。さ
る子あり。且その助より。離り。蔣放と穆春が登雲山の巽より。後
の二人は
一役つた。作者のさる岩見れば所。年二十二

あれより。後金兵入寇の事の趣。上り粗い。さる。呼延灼の再傳。
さる。呼延灼の傳。さる。聞煙音と。呼延灼の。文子の師より。さる。
その時。聞煙音は。不東京にあり。そのうち。金兵
入寇のとき。呼延の家着せり。登雲山へ赴けり。後回の伏線。又徐盛が子の徐盛が
初出世の段。重代の甲。審唐観と。益。老棍を。起。途中。初呼延灼の對面
し。見。甲と。復。為。体。看。官。懐。舊。の。涙。拭。せ。欲。せ。趣。向。わ。り。
と。愛。し。さ。る。れ。も。其。の。甲。の。さ。る。の。故。り。さ。る。後。々。と。さ。る。ま。か。何。の。益。も。な。ま。

惜し。さる。甲と。是。羅。國。か。り。有用の物あり。前傳後傳。終始相應し。
工夫。さる。ん。事。の。多。及。不。さ。る。權。さ。る。殊。苦。類。と。や。の。さ。る。評。年。二十。年
呼延灼。徐盛。義を結ぶ。異姓の兄弟。各親の武藝を美し。嗣は。智
勇。兼。備。の。為。体。り。之。困。志。演。義。の。字。也。周。興。張。苞。の。餘。韻。あり。と。受。
さ。か。さ。宋。の。十。將。黃。河。の。金。兵。を。防。た。り。汪。豹。が。逆。心。より。呼。延。灼。が。隊
より。破。れ。金。兵。竟。り。黃。河。を。渡。せ。光。景。は。実。然。と。彷彿。し。自然。の。如
し。呼。延。灼。徐。盛。と。共。に。朱。全。を。ぶ。め。り。の。遇。せ。既。に。飢。渴。及。び。山。中。に。獵。を
射。り。飢。と。飽。と。欲。り。せ。り。受。す。其。の。時。料。ら。ず。萬。慶。寺。の。惡。僧。を。殺。せ。り。
後。回。の。伏。線。か。く。朱。全。揚。林。と。相。遇。す。飲。馬。川。の。寨。に。赴。け。李。應。の。隊。に
加。り。曹。文。敏。已。に。さ。る。の。出。り。一段の佳作。この次。一回。萬慶寺の暴云化和尚。
金の大将。奔。離。不。降。参。り。五。六。百。の。兵。を。乞。催。し。其。身。の。兵。を。さ。る。合。し。

前傳の舊稿より。聊ちかりかたむ。その物々たる。一部中の拙作也。評二十四

その時李忠信。天子の安危を知ん爲す。楊林戴宗と。東京へ遣せしむ。其の戦ひ乱妨せし荒果く。宿むべし家も亦。嘆ふべし糧も亦。何とあり先ありん。かく楊林が。燕青よあふ段。燕青も食盡せしが。鳥と射て飢不充ん。弓矢則と携へ。一個の小厨を後へ。山間よりいで来り。爲体もいと憂ふ。これより戴宗楊林の二人。燕青の社院に宿しつる程。金兵既よ京城に逼り。危うければ。郭京則六甲の法を以て。敵を退せん。金銀を會ふ。邪陰をも又く。竟不逐電。姚平仲戰ひ敗れ。火宅を離れ。李綱。神師道の計策秘れど。徽宗欽宗金宮よ囚れ。宗澤高宗の御駕を救ふ段まで。正史ありぬる。その仙の物語りなれば。是より先。其の京。曹皇貫。高休楊戩。王黼等の奸臣。其の罪せられて。遠西の軍州へ

安道やしも折。王黼、楊戩、梁師成、刺客王鐵杖を殺せたり。是からの長物より。李俊が。かくは干る。あるねども。所れば。とて。写さむ。燕青王進等の。より。早言所評をむ。前傳より。他更を。比ゆる。いかに妙也。評二十四

燕青が楊林戴宗を救ふ。大名府に赴たる時。拾ひより。木夾と照驗と。楊林と共に。金宮よ。王進。道君。白王。帝。朝見し。柑子。青子。と。ま。御筆の便面を賜り。罪り。段。前傳。李。獅。獅。の。樽。上。と。み。趣。異。し。妙。也。鬼。田。の。如。人。金。兵。等。が。二。帝。を。敬。言。固。の。爲。体。ハ。但。見。て。見。ず。想。像。を。し。ま。う。燕。青。ハ。那。木。夾。と。證。驗。し。く。轍。く。徽。宗。を。朝。見。さ。す。智。計。ま。う。衆。を。提。れ。り。其。の。才。あ。る。ち。あ。れ。ば。妙。也。作者の意通いと憂ふ。那木夾の。今も。其の制度。看官の感深むべし。燕三日が料。金木夾を獲る。下の評。又。其の段。前傳

俊が為小遣羅國の功臣とせしむるに、その思意は、國圓の評内は具そ也。評二十六

戴宗飲馬川を帰す。燕青が所望の銀よりそのひれも、金の大将撻懶宋の人犯を收

管す。大名府を退治せしむるに、燕青の又戴宗楊林と俱に大名府に到り、莫氏盧俊盧俊の

二女人と贈物を折、大刀関勝の偽流用帝劉豫と諫めて身退んとす。劉豫

怒り、関勝を獄に繋ぎ、竟に刑せんとす。燕青が三人奮勇をひく。極ひんと欲

す。謀の出る所あり、かゝる程は一日酒店より東半皮巷内第三家、栲某と云

の、酔ひ送る。木夾と燕青を多き拾ひとり、その名を福子。金營の偽使は打扮

戴宗楊林と、美局を打扮し、城に入る。かの木夾を詮驗とす。関勝を救取

る段、前傳太子家庄より、吳用が偽使とす。太子と杜良と身より引入れ

奇計の舊籍あり、その木夾の後を用より、空同る。且前傳は燕青の虫

語より通し、とあるに照應して、と云ふは、燕青が再傳、これ一部中の手逸へ上り

既に評せし、燕青の二前傳を、十二日、復救あり、本傳を、いやく、看官は嬉しがる

且本傳も秀逸なるに、宋安安花逢春を除くの外、燕青も、遣羅王中、その

亦ありともありませぬ。後本傳の、後王は、カキ、今

ゆゑ、蓋の敷見言ふれ、思案あれども、具そ也、と云ふべし。評二十七

金の大将、劉猥、張信、畢魚豆と俱に、三千の大兵をひく。飲馬川の寨を及、撻懶

馬の衆好漢、登雲山なる、孫立等と、兵を合せんと欲す。伏線あり。且関勝王進等

新に加入せしめ、一役つくと、萬慶寺の舊跡あり。地雷火あり。全勝を

はる為、体も、人息を快くするの、評せしむる。評二十八

太子心算の衆好漢、立見、飲馬川を、南へ赴く軍陣の道中、南北を

界の處あり。金の大将烏禄が大營と、對陣し、戦んと欲す。烏禄は宋の

降將汪豹が、討つ。固く守り、出義、燕青又かの木夾とす。全營

今、金の元帥撻懶の使と唱へ鳥緑を疑せり。竟日鳥緑を襲き走らせり。且汪
約と殺し、夏河に入ると、偕導^{イサナ}の怒を亦言ふ段。此は意味ある趣向の中
かねど、併の木末ある事、用はるこふに、あふ心をも、二百隻の大船を獲て、南
便り、軍しりも、その全勝よれに、心あるに、知らん、わき、李元亨河を渡り、揚劉
村に陣せし時、蒙古、童貫、言向休等、斬臣、汴京を、敗れ、一時、配刺せり、と
也。も、周の乱れも、遠く軍州に到る、を、終、衛村に、信れ、と。李綱が宰相、
有、よ、及、ひ、ぬ、い、信州に配せり、道中金官を、避、り、爲、り、中、年、懸、ま、が、未、到、り、夜、
李元亨の衆好漢、他^{カヒラ}らと陣中よ招き、酒を差り、竟に之を罪を責め、毒酒を
注ぐ、殺せ段、前竹以来の冤を伸べ、人意を快くし、まあり、蒙古、童貫、高
休、茶、飯、其子京等四人梁山、孫、餘、の、好漢、も、茶、鶴、せ、り、て、終、り、と、り、宋、江、と、茶
鶴、等、を、恩、報、を、示、す、あり、又、李、の、よ、い、ひ、し、も、前、竹、の、要、を、い、れ、り、後、

竹に至りて、亦是勸懲の大關鍵、必あべん知らる。勿論正史の中合ひも、素も何
物語の、人、を、殺、す、を、看、る、事、を、也、周勝の正史中、劉、綽、が、斬、れ、り、と、あ、れ、も、燕、青、
救せり、讀史の後は、擗説を、これ、を、慮、定、分、明、の、作、者、の、よ、い、ひ、も、あ、り、又、
教、小、飲、馬、川、の、冬、金、山、の、皆、是、梁、山、伯、の、殘、兵、を、い、れ、り、登、雲、山、の、星、外、の、衆、廷、王、の
主將と、此の故、も、李、元、亨、が、降、り、燕、青、戴、宗、呼、延、灼、周、勝、樊、瑞、公、孫、勝、朱、武、朱、全、の
衆、好、漢、四、名、の、奸、臣、の、積、怨、を、攻、め、且、太、祖、白、王、帝、の、批、言、碑、の、第、三、條、も、大、臣、罪、の、
も、刑、也、と、い、は、れ、り、と、あ、れ、に、も、刀、劍、を、用、を、奪、り、也、鶴、酒、を、灌、り、也、オカカ
段、其、子、京、等、四、人、を、斬、り、也、燕、青、と、相、識、る、燕、青、と、い、ひ、ぬ、
差、乘、の、使、役、也、他、の、臣、使、の、隣、舍、を、い、れ、り、燕、青、料、ら、し、再、會、言、斬、即、葉、茂、
口、に、い、ひ、て、其、子、京、高、俅、等、も、其、具、も、知、れ、り、も、自然、の、如、し、又、樊、瑞、が、押、上、官、を、討、
つ、事、も、李、元、亨、が、善、意、を、述、ぶ、此、に、向、ひ、て、舞、臺、を、一、二、刑、を、行、へ、り、也、安、守、の、い、ひ、也、但、李、子、

應の前傳の大立物もあつた。これに座が不足する。その外より出来ると。その上座は公孫
勝也。且尉勝呼延灼、燕青、楊林等の老つたもの相並ぶ。一座もこれに華やかな人々

あり。あつた。その志を勘げ。押し。賽。宋江といふ。作者の用心は重々。評二十九

是が先戴宗、建康へ赴けり。新都の消息を探りかへせり。田舎に宋澤の

よま。李綱の宰相を罷免。金の元木四太子、十万の兵を領す。建康を動す

笑。然。杜充、河南を棄て。淮西へ退れ。京城を工部局はる。り。と報。り。ん。李

志。急進退。惟。谷。り。く。ひ。お。せ。り。と。残。馬。折。金の大兵到來。と。本。志。急。大。家

驚。見。快。退。走。と。奔。走。り。ぬ。鋒。を。避。け。り。あ。る。も。夜。分。の。る。り。け。れ。び。呼。延。鈺

徐。晟。の。二。人。の。金。の。隊。中。に。混。入。す。脱。は。せ。り。張。龍。張。虎。假。若。と。權。且。金。營。に

在。り。遂。に。横。衝。營。の。大。將。を。執。り。て。殺。す。何。黑。麻。の。麾下。下。子。隨。從。し。金。營。に

囚。れ。り。あ。り。宋。安。平。宋。清。の。名。告。り。あ。ひ。り。三。人。を。編。み。合。し。り。段。を。以。て。監。纏

を。と。り。又。且。宋。江。が。遺。愛。の。名。馬。玉。獅子。と。呼。延。灼。が。御。賜。の。駿。足。烏。驢。馬。と

の。營。内。に。あ。り。れ。び。又。り。段。を。以。て。得。の。馬。と。又。二。疋。の。駿。馬。を。受。て。去。り。し。呼。延。徐

宋。の。之。中。年。各。各。の。馬。を。ち。騎。り。脱。去。り。一段。の。前。傳。の。舊。稿。に。因。る。を。な。れ。び

殊。れ。り。ち。も。り。と。の。た。監。纏。を。と。の。條。下。に。異。同。あり。明。の。舊。稿。の。原。本。に

配。下。の。後。子。は。常。例。錢。を。出。せ。り。四。五。十。兩。の。銀。子。を。給。り。と。あり。重。訂。本。に

管。古。又。の。小。頭。目。を。數。え。り。明。日。本。營。の。衆。後。子。を。帶。り。黑。駿。の。令。あり。支。餉

銀。一。百。兩。入。用。と。り。件。の。銀。子。を。受。と。り。と。あり。第一。回。阮。小。七。が。梁山。泊。懷。舊

の。段。より。第四。十。回。の。團。圓。ま。だ。文。で。易。さ。れ。ま。う。あり。古。書。を。再。刻。し。て。已。ま。は。し。ま。し。め。り

せん。と。う。な。る。に。ん。と。又。の。女。梁山。泊。宋。江。の。廟。内。朝。土。像。の。但。見。結。句。より。上

六。七。の。二。句。夜。者。重。歸。金。剛。生。的。再。獲。紅。塵。と。あ。り。と。脱。り。り。原。本

を。以。り。誤。脱。と。訂。正。し。た。が。よ。う。な。り。た。事。あり。異。同。の。り。り。り。り。り。り。評。二十九

呼延鈺徐晟宋安平三人既れ、梁山泊の頭、到りし時、既、飢渴、及び
ふ水、是、酒、店、を、互、り、て、酒、飯、を、喫、け、り、酒、保、蒙、汗、菜、を、伊、後、生、を、昏、倒
致、を、盤、纏、も、駭、馬、を、奪、ん、と、せ、り、折、か、の、武、太、郎、の、為、に、奸、夫、を、令、ん、と、欲、せ、り、鄆、哥、が
食、客、を、形、く、り、酒、店、を、せ、り、二、年、の、九、人、を、令、ん、と、欲、せ、り、鮮、菜、を、め、り、
移、り、醒、し、く、互、り、者、を、め、り、段、の、前、竹、朱、貴、の、水、亭、の、舊、稿、を、本、竹、は、蒙、汗、菜、を
用、つ、ふ、蒙、和、を、元、達、春、二、来、人、と、極、ひ、出、と、と、れ、と、の、他、も、二、ヶ、所、あ、り、其、示
吳、が、評、し、前、竹、の、蒙、汗、菜、財、帛、と、奪、ん、と、欲、し、善、人、と、昏、倒、せ、り、と、す、り、
本、竹、は、蒙、汗、菜、の、善、人、と、極、ひ、出、と、と、れ、と、の、他、も、二、ヶ、所、あ、り、其、示
吳、の、酒、店、の、蒙、汗、菜、を、奪、ん、と、欲、し、善、人、と、昏、倒、せ、り、と、す、り、
面、を、見、つ、け、り、前、竹、は、さ、び、く、用、ひ、ら、ぬ、を、又、折、之、り、本、竹、は、寫、せ、り、と、す、り、
あ、の、と、れ、呼、延、も、め、り、と、す、り、と、の、他、も、二、ヶ、所、あ、り、其、示

第一回院小七か
梁山泊神案の
後、この寺は、
唐像の勅建
あり、世の凡
そ、云、わ、り、の、こ、の、寺、の、
建、れ、さ、ん、あ、り、小、
七、神、尊、の、お、り、
あ、り、と、す、り、み、か、う、た
十、年、お、り、の、經、り、
べ、り、か、れ、の、後、回、り、
十、年、後、の、世、算、か、の、
四、十、歳、の、世、算、か、の、
院、の、合、さ、り、と、す、り、
べ、り、か、う、と、す、り、お、り、
り、不、静、合、の、り、
心、の、り、あ、り、ま、ま、
り、仙、の、お、り、あ、り、
年、紀、の、算、用、入、れ、
る、か、う、と、す、り、

園、を、ゆ、り、中、年、の、似、り、ゆ、り、遠、水、亭、の、宋、江、が、小、頭、目、り、り、江、忠、と、り、の、酒、店、を、
その身、梁山泊の、宋江等の廟と守り、江忠と宋江の忠臣とりの、蔡
日、が、評、し、元、達、春、前、竹、の、徽、宗、の、勅、建、す、り、宋、江、が、元、達、の、好、漢、の、為、に、梁山泊の
廟、を、建、せ、り、各、位、の、塑、像、を、指、し、呼、延、も、三、人、を、令、ん、と、欲、し、鄆、哥、を、極、導、し、
ま、り、梁山泊を登陸し、江忠を對面し、件、神、前、は、展、拜、し、五、兩、の、銀、子、を、も、福、物、を
備、次、の、日、次、を、願、大、と、り、の、段、の、懷、舊、の、情、又、外、は、あ、り、七、者、官、浩、嘆、を、
写、り、ゆ、り、を、妙、し、さ、れ、第、一、回、院、小、七、が、梁山泊を登陸し、時、の、上、廟、の、ま、あ、り、
建、れ、さ、ん、あ、り、と、す、り、作、さ、り、の、あ、り、ゆ、り、一、筆、と、す、り、指、さ、り、故、不、詳、な、り、
宋、江、等、の、廟、の、り、い、ら、り、と、り、富、言、る、れ、も、さ、り、が、不、汗、家、を、な、り、
璉、水、許、傳、像、を、見、し、序、云、史、稱、宋、江、三、十、六、人、橫、行、齊、魏、官、軍、莫、
抗、而、侯、蒙、舉、討、之、臘、一、周、公、謹、載、其、名、晉、於、秦、辛、雜、識、羅、貫

中漁為小説有登天行道之言。今楊子濟寧之地。為立廟。是逆料。當時非禮之禮。非義之義。江必有之。宋江の廟と

呼ぶ。江忠の酒店は遠田の日。昔年。鄆城縣の都頭あり。趙能が兒子

縛号を百足虫と号す。無棍。御管指揮使。呂元吉の女見の二親を喪ひて。落

人より。櫓擡ひ。その力。黄馬より。騎り。事よ。呼ぶ。呼ぶ。徐晟。斫殺して

呂小姐を救ふ段。百足虫を馬に乗せり。後。呂小姐は騎せん為之。と。蔡日天が

評して。それ。から。無棍の。騎馬。新奇。若。時。駄。貨。馬。を。の。め。の。ま。死

せられ。吾。あ。ん。の。呂。小姐。の。疾。賢。や。く。る。も。古。又。の。痛。む。の。あ。れ。も。後。不。虫。を

呼。呼。延。鉦。呂。妻。よ。よ。嫌。ひ。あ。れ。か。る。危。會。を。な。す。る。ん。の。れ。す。あ。ま。王。等。を

け。あ。せ。り。呂。小姐。を。介。添。ら。れ。よ。ま。り。又。鄆。哥。が。妻。を。ま。れ。も。の。れ。を。な。す。と

の。り。も。後。共。濟。の。女。見。を。妻。せ。り。伏。線。へ。あ。れ。り。例。の。待。棋。も。の。れ。も。後。不。虫。を

約束。あ。り。と。呼。呼。延。鉦。と。え。り。約束。も。よ。よ。と。強。く。言。と。設。れ。の。待。棋。を

る。り。か。あ。り。と。呼。呼。延。鉦。江。忠。と。誦。め。り。信。年。老。より。西。事。を。な。せ。り。これ。五。百

兩の銀子を贈り。老と願せり。の。後。鄆。京。の。贓。財。を。の。り。江。忠。が。取。せ。り。と

し。ま。れ。も。の。力。も。る。不。強。盜。の。夥。中。に。な。り。と。い。ふ。ん。鉦。を。次。母。と。耳。を。賣。り。と。い

ふ。と。い。ふ。ん。の。れ。も。あ。り。と。い。ふ。ん。評。三。十一

江忠の酒店より。鄆城縣より。宋清の宿所へ。遠く。何。か。呼。呼。延。鉦。徐。晟。鄆。哥。と。信。し。宋

安。平。は。信。道。寺。に。て。あ。り。居。宅。に。あ。り。宋。清。夫。婦。の。あ。り。安。平。の。逐。電。を。召。め。り。と

今。は。城。内。の。牢。裏。に。在。り。と。い。ふ。ん。宋。子。平。悲。海。を。堪。え。り。と。呼。呼。徐。晟。辱。め。り。思。道

村。の。九。天。玄。女。廟。の。道。院。に。退。き。計。謀。を。擬。て。段。九。天。玄。女。廟。の。亦。是。前。信。の

照。應。救。世。佛。人。李。心。の。迹。を。賣。り。と。評。三。十一。と。投。て。ま。物。折。希。李。心。の。一。軍。小。遇。看。て

しを告ぐ。李子心會則宋清を拯ひんとす。鄆城縣の城を攻めり。金の
知縣郭京を生拘りぬ。郭京は、嚮う京城を逃去し、後金宮に投降
して、その地の知縣に任せられた。因練使曾世雄と偕し、鄆城縣の守護と
す。又件の曾世雄は、前代よりある曾朝奉の孫、曾海の子
なりければ、宋清を殺し、舊怨を復さんと欲すとあるは、亦是前代に照應
するゆゑのこと。宋清夫妻は年累あり、一日曾世雄、郭京夫婦と解て
洛州に赴けり。李子心會、郭京を奪りて、郭京を奪りし。女子廟頭を祀せ
り。是より先子朱全の家来を遣はんとす。その故郷へ赴けり。久しく信あり
ければ、李子心會、路程の便宜に任じ、戴宗と楊林を遣せり。朱全の曾
横の母親、曾海を奪り、存んとす。母を奪りけり。錢正嘴の居るをよめ
し折、錢正嘴の子を訴せり。金宮に囚はれ、宋清夫妻と一所に置けり。

是より先子皇甫端の金宮に陥りし。元本中阿黑麻也。他の馬医を遣はりし。知
りし。子孫を置く程に、宋清朱全に對面す。是より些の便宜をせり。かゝ皇甫端の
中折、戴宗と楊林、料らざる事會し。宋清朱全の消息をせり。呼徐兩さまの
奪りし。名馬の贖料とす。阿黑麻三千五百銀を求む。その銀子を調進せられ、
宋清朱全の口をこれとす。とらふより、其罪宗楊林を奪りし。子と李子心會を
殺せり。郭京が贖財二千兩あり。ある月一千五百兩不足とす。この程に、阿黑麻は
戰船を造らせん。為し啓行し、曾世雄の宋守人と押さる。件の銀を奪り、
とらふより、別燕音が計りし。李子心會を先より迎へ、遂に曾世雄を
殺戮し、又郭京が汴京を借れり。罪をまゐり、首と剣をさす。曾世雄
俱しくまると。三百名の雜兵の帰降しけり。御道守あり。関勝、楊林、呼
延鈺、孫成を遣り。洛州城へ遣りし。曾世雄かゝり、と偽り城を奪り。

不の戴宗揚
 林の朱全の家
 人の對面を
 小美娘と雷
 ありのままで
 朱赤人と雷
 海をわきま
 つるの美娘
 小廟家財を
 上の兄弟
 作の古れ
 の中を細
 の中を細
 の中を細
 疎漏か
 毎ま

将牛都監并に金兵を剽滅して。宋清、朱全、皇甫端と極む。又楊
 林、朱全、鄭哥、李那、錢正、嘴の宿所より到る。錢正、嘴とその妻、巫氏（注）
 敢て雷を救ひ、叔、朱全の妻、朱赤人と并に雷を伴へり。去女廟の
 かりぬる段、或は前傳の舊稿、或は本傳の、前回は似たり。あはれか、けり
 けたし。その中は、阿黑麻三千五百の銀を、木をとりて、李忠も、李那、京が、賊財
 の銀、二千兩り、其の數不足を、戴院長、到り、登雲山、拿來、纜、可足、數
 不知、八日、可往、還、廢とあるは、いふや、李忠、十數名の好漢、飲馬川の
 山寨と、登雲山と、あるは、一千の兵を、あるべし。あつた時、軍用の銀子、あつて
 戴宗と、登雲山へ遣し。宋廷玉、孫立等、を借せんと欲せん。いふは
 了。嚮は、燕喜が、莫氏、盧氏と、金言より、借取ると、戴宗と、飲馬川へ遣し。
 李忠、銀を借せ時、銀、早も、息、ま、つ、る、折、の、財、帛、の、些、あり、し、ん

故の作者は問ふに知れぬか。評三十二

李忠、管、り、か、り、あり、世勤王の志、念、わ、け、り、畢、豊、を、殺、す、の、後、ゆ、ひ
 金の、大、兵、の、寨、と、攻、ん、と、怖、れ、飲、馬、川、と、ち、登、雲、山、へ、遣、し、ん
 迺、飲、馬、の、山、寨、の、畢、豊、を、始、り、畢、豊、を、終、る、對、照、と、す、ゆ、に、李、忠、等、ハ
 志、願、の、吹、響、と、頼、ん、と、り、ひ、る、宋、澤、ハ、世、と、去、り、張、所、ハ、配、刺、せ、れ、と、す、之
 一、か、い、く、望、を、失、ひ、て、遂、に、登、雲、山、の、寨、を、赴、き、宋、廷、玉、等、と、兵、馬、を、合、し、り、之、の
 進、退、を、定、む、る、安、道、全、が、計、謀、を、任、じ、り、金、教、忠、嶋、を、推、渡、り、木、子、俊、と、一、猪、は
 ろ、ま、り、と、渡、海、の、船、の、り、り、と、金、の、阿、黑、麻、を、出、し、り、五百、騎、の、大、海、賊、と、さ、る
 ら、兵、奪、取、飲、馬、登、雲、山、の、兩、寨、の、好、漢、等、皆、大、洋、に、没、お、段、ハ、幾、條、あ、り、れ、る、長
 物、諸、の、一、擧、を、輕、く、掃、り、取、り、筆、を、筆、を、中、に、呼、び、之、の、家、眷、と、同、煥、章、ハ、女
 二人、を、方、角、の、衣、を、着、し、登、雲、山、を、呼、び、近、約、を、あ、の、ひ、め、い、と、さ、す、又、忠、を、飲、馬、川、の、山、寨、に、初

裴宜が二百人の嚙囉コマキトと聚てありあり。尔後李應、楊林、杜興、蔡慶の衆、丹漢相加りて、程遠くぬ龍角岡の畢豊を襲ひ、擊つ走らしめ、其衆を奪ひ、その衆と合し、李應を推して寨主とせり。第五、又登平山なる寨あり、その寨潤が一二百の嚙囉と聚てありあり。尔後孫立、孫新、顧大嫂、阮小七等、亦来廷玉、扈成と俱に相加り、竟に亦来廷玉を寨主とせり。第六、かく第三十回に至り、飲馬川と登雲山の好漢等、寨を築きてあり。其寨大洋の流るは、是前傳の舊稿に梁山泊の五の初、王倫が寨ありしを、王倫竟に林冲を殺し、晁蓋、宋江、寨主とありぬ。尔後宋江等、真人招安ありて、梁山を棄て、京城に赴き、遠を討ち方臘を征し、遂にその功を賞せり。其趣向も前後一致されり。よふ本傳と、濟水前傳といふものも、相似く非なる事あり。評三十四

は、本傳三十回までの趣向と思惟多し。大凡良友義兄弟の厄難中、小留りて辛く去り、救ひの外、又殊るもの助あり。先第一回、阮小七が石碣村なる宿所を、張幹を殺し、其母親を恨み、七命を路より母を失ひ、鄒潤の山寨あり、再會せん初、山に言ひ、又扈成の財宝と悪人毛身を奪取せり。是、鄒潤、阮小七、孫新、顧大嫂等、扈成の爲に夜襲し、毛身を殺し、其財宝をとりかへぬ。第二、あるの縁坐あり、病尉遲孫立は、登州の楊太守に搦捕られ、牢内に在りしを、孫新、鄒潤、阮小七等、扈成が計り、伴ひ、統制亦来廷玉と謀降させ、遂に登州城を攻めて、孫立を救ひ、牢内、杜興、孫立を頼れり。樂和は書翰を届せしむ。東京に到り、王都尉の府内を搦捕られし。彰德府に刺配せられ、楊林は再會あり、俱に馮公人と玉娥を殺し、官官李應が爲に怨を復し、馳て配所を逃れ去り、自ら救ふ。第四、同云、李應は、杜興の縁坐あり、濟州の知府に搦捕りて、牢内に在りしを、楊林則

裴宣、杜興と俱に計と定め、牢子に蒙汗茶を飲し、昏倒させ、竟も李
應を救ひ出ぬ。第六、秦明の妻、花榮の妻、花榮の子、花逢春、萬柳庄に在り
一時、建康の王宣慰が、郭京より呼ばれて、件の二恭人と、花逢春を搦捕せ、
榜上に乗せ、籠とて、樂和が計を、王宣慰と郭京のあつし時、汪五狗
と、看守の養娘を、蒙汗茶を飲し、昏倒せしめ、秦花の二恭人と
花逢春を救ひ出しぬ。第八、李俊が元宵の燈籠を親んと、常州の城
内、小舟時、賈保、狄成と俱に、呂太守を搦捕せしめ、牢内に在りし時、樂和が計
を、花逢春と、王朝恩を打扱せしめ、餘のもの、皆伴當を打
扱し、常州城に赴き、呂太守を欺り捕籠て、そのまゝ計ひて、李俊と
賈保、狄成を救ひ出しぬ。第十、蔣敬が陸祥、張徳を劫り、五百兩の
銀子と失ひし時、穆春料らむ、蔣敬を再會し、張徳と陸祥を破殺し、

件の銀子ととも復せしあり。第六、蔣敬が病て、雙峰廟に泊りて、宋江の時、
三虎の悪棍、王大立を搦捕せしめ、穆春が知り、悪棍を斬撃し、
一、竟も蔣敬を救ひ出し、もう去りしなり。第七、黄信が疑ひの罪案
を受けて、牛都監を搦捕せしめ、囚車に乗せしめ、わらわらと、宋江と、
孫立、扈成、阮小七と俱に、五百人の囃囉を領て、去向に埋伏し、牛都監を
搦捕せしめ、黄信を救ひしめ、その段に、是前傳に、燕順が宋江と、花
榮を救ひ、蒼梧に、第八、柴進が同、源を搦捕せしめ、滄州の牢内に
在り、李忠がこれを知り、柴進を救ひしめ、滄州城を攻し時、高
源、則節、級、牢子分付し、柴進を殺せしめ、時、節、級、牢子と、
の、柴進を憐れ、その夜、件の牢子に、蒙汗茶を飲し、昏倒させ、
柴進を救ひし、先唐牛見が家より呼ばせ、後、李忠、源、手しぬ。其の

段ハ其も直^二前傳の故態^一なり。其の趣を見^二見るもの^一。第廿、盧俊徳の毒
莫氏^一の女見と共に。金管^一を合^二合^一れし。燕青二千の銀子と^一。辛く^一
救ひ^二あ^一れ。第廿、四回、関勝が劉豫を諫め^二獄に繫^一る。既^二斬^一ら^二れ^一
つ^一と^一。燕青金の使^一を打^二拵^一ち。金の木夾^一と照^二駭^一り。劉豫を殺^一
関勝と^一の家老^一と救^一ふ。飲馬川へ遣^一ふ。第廿、五回、呼延^一鉦、徐^一晟が
金管^一を混^一入^二入^一。泊^一出^一る。時、宋^一安^一平^一の^一あ^一り。三人^一俱^一に^一
き^一り。便^一是^一自^一救^一ふ。第廿、八回、宋^一清^一夫^一婦^一と。朱^一全^一が^一金^一管^一を^一捕^一ま^一りて^一
一^一時、燕^一青^一が^一計^一を^一し^一。曾^一世^一雄^一を^一殺^一す。其^一を^一御^一道^一守^一り。好^一漢^一公^一城^一
入^一。牛^一都^一監^一と^一襲^一を^一捕^一ま^一り。宋^一清^一、朱^一全^一を^一救^一ひ^一あ^一れ。第廿、九回、呂^一小^一姐^一の^一百^一足^一虫^一を^一探^一
尋^一せ^一れ^一時、呼^一延^一鉦、徐^一晟^一を^一百^一足^一虫^一と^一破^一殺^一す。呂^一小^一姐^一を^一救^一ひ^一あ^一れ。第廿、八回、
雷^一澤^一が^一、其^一の^一光^一棍^一錢^一正^一嘴^一の^一家^一を^一役^一使^一せ^一り^一を^一け^一り^一。朱^一全^一、楊^一林^一等^一。

錢^一正^一嘴^一并^一其^一の^一妻^一毒^一悪^一き^一。其^一を^一斫^一殺^一す。雷^一澤^一を^一救^一ひ^一あ^一れ。第廿、九回、
部^一四^一十^一回^一の^一内^一、二^一十^一九^一回^一ま^一り^一。人^一の^一危^一難^一と^一救^一ひ^一あ^一れ。二十六^一回^一ま^一り^一。其^一の^一内^一財^一物^一
を^一復^一せ^一り^一。二^一番^一危^一成^一と^一存^一。其^一の^一為^一なり。又^一世^一家^一汗^一茶^一と^一用^一ひ^一り^一。三^一番^一入^一。其^一中^一秦^一
花^一二^一人^一の^一王^一宣^一展^一の^一樓^一上^一と^一り^一。籠^一ら^一れ^一。逼^一迫^一せ^一れ^一。為^一体^一ハ^一前^一傳^一
林^一冲^一の^一妻^一の^一高^一衙^一内^一に^一逼^一迫^一せ^一れ^一。故^一態^一也^一。又^一黃^一信^一が^一囚^一車^一と^一。孫^一立^一
亦^一延^一玉^一を^一救^一ひ^一あ^一れ。前^一傳^一ハ^一燕^一順^一が^一。宋^一江^一花^一榮^一を^一救^一ひ^一あ^一れ。故^一態^一也^一。其^一の^一為^一
る^一上^一の^一も^一ひ^一あ^一れ。又^一柴^一進^一が^一。滄^一州^一牢^一の^一一^一回^一ハ^一人^一の^一力^一を^一以^一て^一。前^一傳^一の^一趣^一を^一
ゆ^一ぎ^一び^一又^一は^一如^一し。但^一高^一源^一の^一兄^一高^一廉^一の^一如^一く。幻^一術^一を^一以^一て^一。せ^一ら^一う^一と^一。吉^一定^一の^一
幫^一助^一の^一増^一補^一の^一文^一也^一。後^一傳^一ハ^一作^一者^一の^一如^一く。故^一立^一息^一。前^一傳^一の^一舊^一稿^一を^一
摸^一擬^一せ^一り。看^一官^一を^一受^一教^一あ^一せ^一る^一為^一る^一べ^一し^一也^一。人^一の^一危^一難^一を^一救^一ひ^一
る^一也^一。前^一傳^一ハ^一ま^一り^一又^一え^一る^一。其^一中^一ハ^一林^一冲^一と^一盧^一俊^一徳^一の^一趣^一を^一以^一て^一。趣^一粗

相似たり。然るに後徳子。故書似つり。實り。宋江が小教夷山と云ふ。是
禍子ありを焼直し。太子俊が常州の元宵燈を親。福子あり。福
をたぐ。しめられたるを。李俊の人。ふ似れたる。と云ふ。世妙の
舊類算之。割籍と落を取んと。改められたる。舊類算の。前傳の舊類算
の工。織る事。及。新奇の趣向。出来ぬ。い。の作。者の才。せ。む。前傳の舊類算
の。做ひ。り。た。る。を。宋。景。天。が。新。評。は。る。も。と。も。事。を。み。封。市。助。の。曲
筆。る。れ。甘。心。を。知。せ。解。言。る。ん。か。也。評。三。十。五
飲馬川。登。雲。山。の。好。漢。ホ。家。春。後。類。三。千。五。百。の。兵。と。俱。大。洋。小。衆。
浮。め。各。船。金。銀。鬼。嶋。を。ゆ。り。と。五。六。日。あり。黑。夜。は。方。位。を。と。失。ひ。
日本。國。薩。摩。州。の。岸。近。く。ま。ぬ。と。和。人。船。内。の。財。物。を。利。え。と。
許。り。小。船。を。棄。て。推。取。置。撃。んと。と。李。應。燕。青。來。廷

玉等の象好漢。連り。防。け。物。も。せ。凌。振。大。砲。を。連。度。ち。和。人。の
小船。と。蒸。籠。粉。を。み。せ。和。人。の。事。も。退。く。と。李。心。身。方。を。う。れ。ん。と。
怖。れ。事。の。情。を。同。も。和。人。内。中。は。通。事。あり。則。意。趣。を。報。り。が
李。應。燕。青。の。事。と。ゆ。一。千。石。の。和。人。の。細。段。五。百。疋。棉。布。五。百。疋。を
分。賞。し。又。通。事。也。細。段。四。疋。棉。布。四。疋。を。引。出。物。と。日本。船。を
退。く。を。纜。を。事。を。救。正。す。清水。澳。に。到。り。と。又。段。は。薩。摩。の。海
岸。あり。才。は。兩。日。あり。清水。澳。は。着。岸。せ。と。ある。あ。まり。さ。や。く。と。の。
日本人。の。乱。妨。の。為。体。に。明。の。時。日本。より。唐山。の。海。濱。近。に。州。縣。の
船。を。よ。せ。乱。妨。さ。る。ら。れ。ば。か。ら。物。を。と。他。の。設。け。後。回。は。日本。より
関。白。と。大。將。の。薩。頭。院。の。援。兵。せ。伏。鎧。水。下。を。と。れ。天。朝。の。邊。境。の
細。氏。ま。る。也。武。勇。の。外。國。勝。れ。護。衛。の。事。も。あ。れ。ば。李。心。身。三。千。五。百。の。兵

とて。提と取とむる。千足の細皮棉布を贈り。和鮮と云ふ。便是。皇國人の武勇。証と云ふ。評三十六

第三十一回以下。暹羅國の事と云う。暹羅王馬賽真の漢の伏波將軍馬援が後裔と云ふ。王妃蕭氏の父。宋の泰和政事ありと。章懐丞相が陷害せられた。修州が安道の後。逃れて暹羅に至る。女兒を馬賽真の妻とせしむ。第十回。後玉芝の公主と云ふ。花逢春が妻ありと云ふ。亦虫種が嫌ひあり。明人の胡元の妻。狄の懲り。胡元の唐山の服色を改め。から筆をみせ。云々と云ふ。清主の。難種の部落と云ふ。又服色を改め。頭毛を剃せられた。段。明板の原本あり。萬壽山宗廟の俱見あり。皇訂本あり。削りたる。

佳句あり。秦皇の意思。慙りぬ。古書と云ふ。筆削り。國主の夏の時。幣帛焚化の火。國主の肩に落りて。哀龍の袍を焦し。又道士徐神翁が遇着し。出家の功德を説れ。四句の偈語と云ふ。後來の凶兆を示され。みる。後回の伏線あり。共清の年来逆謀ありと云ふ。御向の勇臣。吞珪の憚り。果を吞。珪の死後。又駢馬。花逢春。宋の大將軍。李俊が憚り。天竺より来ると云ふ。惡僧薩頭陀が遇着し。多の羽翬と云ふ。府内に當。腹心と頼む。日。母子。石。官符。段。共清の玉芝の公主の色。愛想を焦し。云々と云ふ。後傳下の細評。奸人。做壞事。多。是。從。財。色。上。來。共清謀。還未起。頭。就。先。相。着。玉芝の公主。寫得。極。像。といふ。共清十

六七の女見あれ。年歳既亦四五十なり。比と逆謀の時。色慾と先あり。其の間の淨瑠璃本めたり。薩頭陀も亦共濟の女見に掛想。後竟本意を遂るも。他に出家人のりるれ。色中の餓鬼に共濟と格別る。評三十七

薩頭陀の幻術あり。又房樂と共濟は著め。他が慾を克する。後四主と毒殺の伏線也。又共濟は薩頭陀。國主太子李俊。花逢春を呪ふ段。用一木人長六寸三分。取本人年甲。安在木人腹内。把七隻。綉花針。將木人的。七穴。釘住。毎日清晨。燒一道符。晚上。奠羹飯。再持秘咒。若是平人。七日必死。若是福厚。貴重之人。亦要三七也。必要死とあり。其の間の雜劇。臺人形とのりの似。この魔鬼。厭鬼法。六七歳の太子の死。困

且當作但
是筆上誤
寫無疑

主と李俊。花逢春の善事。是福厚也。其重る。故るれ。蔡見か評。又太子を殺す。國主の貌を絶る。李俊を王とする。これハ。又蔡見か總評。厭勝之術。從來有之。且無論書傳。所載本朝康熙年間。吾邑前有俞道婆。後有錢道婆。俱行此術。俗名拜樟神。其術取樟木刻為人形。約三寸餘。取人家小兒。聰俊者。定竊得。其年甲。書符。納于木人腹中。用符咒。拜祭七日。其兒即死。二孽前後俱為太守所發。予曾親見。其木牘。此處寫薩頭陀。厭鬼法。不為荒唐証也。といふ。其の間の雜劇。カブキ。臺人形。必是本據あり。評三十八

薩頭陀の厭鬼法。李俊の年甲の知りか。死を共濟の病。其の年。李俊の四十歳の賀筵と用。これより。年甲の知れり。

宋の徽宗の
崇寧元年より
宣和七年まで
在位二十四年
之且宣和三年
方臘が伏魔を
し方金剛入
寇二帝北近
まゝ終つた
年これの亦
後修められた
向の立まると
年紀あるま
れも併ひの
るに由るべ
李俊の年紀の
のれり

とあるにや。去れども。前後宋江は十六六年の間梁山泊に在りし。未
だそと。招安の後。遼を討ち方臘を征せり。歲月。又や。五六年。及ぶ。又
李俊が退降し。金鼓嶋を敷き。年序。又。四五年。を
歴し。いつか。暹羅王と和議成り。年賀の地を用くま。又。四三年。を
過す。ん。これを合し。傳。八九年。を。李俊の四十年。を
らん。宋江と初ま。面會せり。頃。十四五歳の後生るべし。前後。李俊が年。歳
の。宋江と相識する。と。後生ると。必。三十
前後の。人。の。時。四十の。賀。年。合。五。十。歳。の。賀。本。が。相
心。か。を。後。年。旗。音。十。の。女。見。を。時。夫。年。歳。大
過。不。及。あ。れ。四。十。歳。は。五。つ。後。を。守。り。前。と。と。れ。と。と。見。維。老
夫。少。毒。る。も。五。十。歳。は。宜。い。か。べ。評。二十九

花達春の。言。同。王。月。倪。雲。と。俱。李。俊。が。四。十。の。毒。算。を。慶。賀。の。為。金
鼓。嶋。へ。赴。り。比。共。三。隣。の。薩。頭。院。と。相。計。執。逆。の。密。談。あり。其。故。不
薩。頭。院。は。石。城。の。草。鵬。草。鷗。と。ふ。二。個。の。兄。弟。が。五。千。の。苗。兵。を。わ。く
黃。茅。嶋。に。在。り。と。吸。の。資。助。と。ま。う。か。く。五。月。五。日。は。共。三。隣。の。國。主。を
請。符。せ。り。薩。頭。院。の。長。生。不。老。の。仙。丹。と。り。唱。へ。大。毒。の。九。菜。を
國。主。に。薦。め。即。生。子。殺。死。又。供。奉。の。禪。を。如。勢。と。り。勢。走。り。段。の
細。評。頭。院。素。練。比。藥。不。知。作。何。用。處。と。い。ひ。理。屈。を。と。り
先。子。李。子。太。公。が。甚。毒。高。の。奸。臣。と。毒。殺。せ。折。り。た。の。用。意。あ。る。も。あ
ら。ん。れ。も。軍。用。の。毒。物。も。獲。へ。薩。頭。院。も。亦。毒。死。良。医。の。敗
鼓。の。草。を。も。野。と。り。如。く。惡。僧。を。れ。人。を。殺。す。丹。毒。を。野。へ。と。ん
の。の。評。四。十

共済弒逆の後いく程もゆく位と正えと申時、大臣のみまき賀せど、共済楚
 不免の大員、五十餘名を殺せんとす。其時、太子俊が王である
 と見え、さうく衆兄弟を任用の障りなることを、さう作り候へども、それ初め
 暹羅の大臣の姓名を一人もあはれず、剃大衆とて束のく、逆逆の爲に屠
 られ、あえざるもあはれざる中、五六人、精忠のめり、共済と戦ひて
 薩頭陀が幻術あり、それらも替れざるなり。今世に趣め、又共済は薩
 頭陀と偖、後宮に入るとも、既皆倒さるるに、恐れぬ物も、後宮へ
 入ると候や、その故に、國母も公主も、不後宮に候へども、さう、何の故
 るとぞ、知らず、國母も公主も、逆臣に汚れざる。後宮と腹れぬ、片山里まの
 ぶ、そのさ又の障りのあるや、且あれを物とも、まはらば、いふ事、後宮の入りと
 のことと、その節のふと、首をと、か、凡情も、作り候へ。評四十一

國主弒せられ、後、蕭妃玉芝之公主の夢をええ、後、來のるを告げ段は
 我、不聽、良言、謀、遭、毒、手、今、隨、丹、霞、霞、師、父、出、了、家、倒、也、道
 遂、自、在、と、ある條下の細評、倣鬼出家、千古奇事、といふ、コラヒ
 得るいと、國主又り、宮中、有、金、甲、神、人、守、住、賊、臣、不、敢、進、
 來、你、母、子、且、自、自、見、心、といふ、も、あ、る、は、ら、る、金、甲、の、神、人、常、に、宮、中、を
 守る、又、驗、あ、る、か、何、ぞ、太、子、の、厭、鬼、死、せ、れ、し、と、救、ぶ、何、ぞ、國、主、の、毒、殺
 せ、ら、れ、を、救、ぶ、か、の、金、甲、神、國、王、と、太、子、と、え、殺、せ、り、國、母、と、公、主、を、の、守
 ら、ん、か、の、故、あ、る、か、あ、ら、う、と、い、ふ、も、あ、る、と、い、ふ、事、は、シルサ 作者のいふ、國母と公主を
 舊の^{モト}、宮中、に、措、く、あ、る、れ、が、作、り、る、淺、く、あ、る、理、り、候、は、ら、ら、り、
 の、間、も、拙、に、他、方、か、る、俗、筆、を、な、す、あ、ら、う、と、い、ふ、の、作、者、あ、は、れ、た、ら、う、と、い、ふ、評、四、十、二
 花、逢、春、日、進、四、難、へ、か、る、中、途、船、中、か、る、共、済、の、弒、逆、の、り、を、せ、す、を、知、り、舊、死、哀、

高青倪重と俱ニ金教忠嶋ノ立リ。李俊ノ復讐言の大義を謀る。李俊則金教忠嶋ノ勳ヲ出シ。共清ノ攻メ。薩頭陀ノ長法ノ通シ。且伏シ。加之ニ草鴉兄弟三人。萬丈不啻ノ三男ありて。五千の苗兵ヲ戰ヘ。木子俊ノ辱シ。敗レ。明珠嶋ノ退リ時。又頭陀ノ火攻セ。便ニ三圍ニ。漢義ノ下折リ。暴雨忽然と降リ。料シ必死ヲ脱レ。便是三圍ニ。漢義ノ司馬仲達父子ノ胡蓋ノ谷ノ劉ノ縞ノ摸擬シ。尔程ニ李俊ノ幸ク。金教忠嶋ノ退リ。薩頭陀ノ草鴉兄弟ノ進ミ。これを攻メ。段ノ木子俊ノ頭陀ノ幻術ヲ折リ。準備セ。汚穢ノ物ノ別ニ。用ヒ。戦ヘ。戦船利ヲ失フ。又退リ。城ヲ守ル。其時ニ草威高青等ノ四ノ人ノ戰船敗走シ。城ヲ守ル。王ノ進ミ。羅城ノ空ニ。虜ノ兵ノ二百名ノ殘兵ヲ領テ。暹羅ノ子ノ到リ。共清ノ草鴉等ノ用心ヲ察シ。城ヲ攻メ。捕ル。其時ニ高青月ノ守城ノ百姓ノ和合ノ見ガ。内ニ志ヲ立テ。獨志ノびノ王ノとシ。城ヲ燒シ。謀リ。草鴉ノ由リ。主ノ見テ。李俊ノ國主ノ為シ。義兵ヲ起シ。花逢春ノと共ニ。薩頭陀ノと氣ヲ告ス。是ノ宮中ニ。再計較ヲ作シ。城ヲ守ル。共清ノ後宮ノと胡越ノ。言ヒ。數日ニ。那金甲神ノ擁護ヲ。紙ノ趣ノ向シ。地ヲ守ル。李俊ノ將官ノ。俊ノ戰ヒ。金教忠嶋ノ往進ノ後ニ。金教忠嶋ノ到リ。李俊ノ樂和ノ。皆ノ。

守城の百姓。和合見が内志あり。獨志のびる王とゆる。城を焼んと謀り。草鴉が由あり。主の見たり。李俊が國主の爲に義兵を起し。花逢春と共俱に薩頭陀と氣を告ぐ。是より宮中より再計較を作とあり。城を守り共清が後宮と胡越の言。數日進軍を知らず。那金甲神の擁護を乞ふ。紙の趣向は似たり。この時李俊は玉女が海鯨船清水濱に居り。地を守る李俊が將官。俊が戦ひ難きものと告げせ。金教忠嶋へ往進の後。李俊は心算の良き。金教忠嶋に到り。李俊樂和を對面し。是は往時の胸臆を叙る段。皆あるべし。評し。公孫勝薩頭陀の幻術を破り。象

好漢李俊と傳ふ。暹羅に攻む。其清惟れ計を頭陀に伺し。薩頭陀
 この機を棄し。其清の女兒と妻をす。其時高僧宮中あり。夜分火を
 奉て暗跡とて。城遂に破れり。李俊元芝逢春等。其清并家口四、
 餘人を誅戮す。宮中より到り。国母公主と慰問し。又草鴟を殺す。薩頭
 陀に逃亡す。往方を知らば。是より先。草鴟の棄進玉を撃れり。獨草
 鴟の薩頭陀の指揮より。日本國に赴けり。其を備んとす。又東海へ去り
 一丸。頭陀敗れり。金聚島より。暹羅に
くまの比の巻九三十四回。二下左ナナ
 青。徐晟の各息を査訪し。薩頭陀を令んと欲す。第三日。鎮海
 寺に到り。塔下は高深と。薩頭陀は此より。其清の女兒を推して。塔
 の頂上第一層に敷れて。其清の女兒。頭陀を死せし。戒刀を塔下へ落
 し。頭陀を擲捕せり。と云々と訴て。其身も其子縛縛らる。此の段の本文不

原。來。薩。頭。陀。雖。會。收。法。却。不。會。騰。云。と。あり。此の間の信より。不。送。
口。狀。頭。陀。飛。騰。の。術。あり。敷。れて。塔。上。に。在。る。べ。し。と。云。れ。ば。か。て。は。あり。
脆。り。其。清。頭。陀。の。亡。所。也。ある。より。い。は。し。む。新。奇。の。趣。向。も。あ。る。を。總。て
あ。ぶ。り。趣。あ。り。る。より。味。薄。り。其。の。三。十。回。と。十。四。回。の。重。訂。本。は。文。を
易。し。又。特。に。ま。り。る。も。れ。も。古。又。の。同。し。れ。が。異。同。と。正。し。及。び。頭。陀。其。清。伏
誅。後。に。李。俊。が。國。主。の。大。喪。を。執。行。し。れ。り。亦。ち。國。母。李。俊。が。の。衆
好。漢。を。召。聚。す。國。位。の。事。を。諒。り。李。俊。の。元。驛。馬。を。譲。り。元。芝。逢。春。并。の
衆。好。漢。の。李。俊。を。推。し。て。國。位。と。踐。め。ら。れ。し。も。古。又。の。定。り。る。大。家。退。散。を。す
れ。も。李。子。俊。の。正。佐。子。郎。が。元。帥。府。に。在。り。國。事。を。終。へ。る。こ。の。作。者。の。ま。り
國。體。を。張。ん。と。欲。せ。故。を。李。俊。に。速。達。せ。し。後。宋。の。冊。封。を。受。て。真。主。と。是。る。人。試。し。向。元。地
國。の。戲。作。者。の。加。以。理。義。を。す。る。人。の。今。日。の。世。日。由。あり。や。む。し。看。官。ら。ち。意。を

ゆる。字と不字之分別せ。巧拙を知る捷徑るべし。評四十二

共濟薩頭陀が鳥首せし時。共濟の女兒を斬らるべしと。信長が諸ふりあるを。信長は

獄を置れし。其後日大赦の時。野哥等毒をんとせし。徐長成は江忠の酒店に。野哥等毒を

取らせんと約束せし。あるなり。これを亦前信長。宋江が一文書目と。王孫虎も毒を

前多と果せし。舊稿に。野哥のりあり。其のりあり。其のりあり。武松のりあり。評

中子具ふ。李俊の根柢居ると云。衆將官の職官位置と云。第一味

進第ニ公孫騰以下略す。其の條。原本の教老頭評小。官制。参考用列代通俗

演義とあり。又西洋記の具あり。書目名。三宅太監西洋記通俗演義と

云。通俗とあり。明より。上より。見る。其のりあり。俗稱るべし。評四十五

草鵬が日本の兵を借り。かき。段々日本國在大海島中。綿一且敷

千里。官轄十二州。多出金銀珍異之物。其人雖好詩書古玩

却今見詐好殺。又名倭國十二州。共十萬兵。虎踞海外。と云

と云。其の十二州ハ薩摩十二嶋を以。筑前筑後肥前肥

後。豊前。豊後。日向。大隅。壹岐。薩摩。周防。長門の十二州を以。欽

あろ。又云。日本國乃秦始皇時。徐福到海中。取長生不

老之藥。帶有童男童女百工技藝。醫巫卜筮。有數千人。

因始皇王是命。徐福避地于此。用創起。唐山。唐

通の謬説。其の辨。其のりあり。清子。オ。評証。知

又云。原來。園白。是日本大將。的官。取。每。事。都。要。園白。他。白。意

思。不是。姓。那。園白。身長。八尺。勇力。過。人。領。和。王。令。點。薩。摩。大

隅。二。州。之。兵。共。是。一。萬。戰。船。三。百。餘。奈。旗。用。洋。其。り。園白。豊

大周のしりぞけあまら。人の石曼子と指さる。笑ふべし。明史に嶋津
嶋、和兵を引く。其は薩薩頭陀の勲をたしむ。嶋津嶋、青
嶋嶋の嶋長、斂羅漢、及屠峰、余漏の嶋長と謀り合せ。和兵の魁、
暹羅の城を囲む。那、周自、果、然、足、智、多、謀、和、兵、勇、猛、心、持、不、暇
あむ。李俊、衆、將、官、を、節、制、す。日、夜、限、防、台、を、築、く。西、軍、の、鋒、を、交
がし。時、周、自、黑、鬼、は、日、進、羅、の、戦、船、の、底、を、穴、穿、し、其、の、故、に、李、俊、の、水、軍、
利、を、失、く。城、は、急、に、陥、す。那、黑、鬼、可、以、書、言、夜、在、水、中、飢、餓、時、就、
捕、魚、蝦、生、食、周、自、叫、去、盡、其、船、底、と、ある。黑、鬼、ハ、蝦、夷、と、
云、ん、又、云、周、自、騎、一、隻、白、象、盤、頭、結、髮、手、執、鐵、骨、乃、木、較、過、
来、と、周、自、の、白、象、を、最、大、と、し、草、鵬、已、東、門、を、攻、破、り、時、燕、音、則、草、
鵬、の、肩、を、射、て、死、す。竟、は、花、蓮、春、に、刺、殺、す。これより、和兵の

和兵のいふ
ぞか黒鬼中未
凍死やとあり
いふ笑ふは
其に野作
毎亦雪不埋れ
死ぶるゆ
勝雪といひ
舟を覆ふは
船を覆ふは
とありとあり
とありとあり

困して解たて退く時。公孫勝、風を禱り。暹羅南暖の地方少く、未曾
有る大雪を降らせし。和兵遂に水寨を捨てし。其の時、李
俊等が軍、遂に那、和兵、只、怕、冷、不、怕、熱、從、來、没、有、寒、衣、况
是、秋、天、到、的、當、得、這、般、寒、冷、縮、做、一、團、凍、死、無、數、と
あり。笑ふべし。其の目、琉球なる。常は温暖の地方といふも、其
寒、衣、あ、ら、ず、冬、を、凌、ぐ、と、ゆ、ど、原、を、経、の、富、言、は、係、る、の、
又、只、井、蛙、の、臆、説、之、唐、人、等、往、々、天、朝、の、風、土、を、説、く、あり。其
説、并、多、く、あり。彼の書、信、は、載、る、外、周、の、事、も、これ、を、其、の、諺、りの
動、く、ぬ、を、知、る、べ、し。かく、其、の、大、雪、あ、り、水、も、氷、柱、に、あ、り、周、自、を
あ、ら、ず、一、萬、の、和、兵、黑、鬼、と、共、に、凍、死、す。水晶人の下、氷重衣
あり。僵々たり。只、周、自、の、騎、り、る、白、象、の、死、る、と、い、ふ、其、の、白、象、も、

足利義満の時。南越國あり。白象と貢獻せしるありしをばすてく
の如く作成し、亦名抑明清の釋業に往々。皇國人の船と寄
せり。吳楚州縣を擾亂せし。唐鑑をまつ。ゆを作り設けり。愉悅の
るとをばす。昔年南北朝の内乱あり。竟北戰國あり。比鎮西の浮流人勇悍
るものも。吳楚の州に赴たり。乱妨甚しうけれが。足利義満の時。明
朝より。乱妨人と制し。あつべし。といひおとさるありし。是より以來。近
世濃國の落人なきまじ。唐山の海岸に推しせり。人民を屠り
財貨を豪奪せり。既し歲月を累ひて。甚しかりし。が。釋史は和
兵を唐鑑にまじりて。ゆを。ゆの憤りと洩せり。清の逸田史が女仙外
史も。和兵侵犯の爲體と写し。唐實見が唐下の女仙の和兵に
輪々如せり。遂に死に至りし。并に和兵を剿滅せり。ゆを。作設

よの亦是和乱の時の恥と雪り。憤りをも。ゆを。ゆの年來の乱妨ハ皆是
落人浮浪人の所為なり。且外國へ推流りてのるるれば。却て。皇國ハ
其を和し。故に書傳に載せしめるなれば。和乱の爲體ハ明史に詳ハ
ス。その餘。五雜俎以下の小説中。多く和乱のゆを載し。たが彼の書
策とせん。ゆありしと想像する。ゆは後傳。女仙外史のゆあり。ゆ
唐山の釋説。ゆの趣と撮合し。作設けし。ゆを。ゆ見ありし。かど。
ゆは。ゆの書名と尋ね。ゆのゆをゆとゆとゆの情あり。ゆは。亮然るべし。
書。成于憤とゆも。か。ゆあり。ゆ。一笑千笑。評四十四
たれ。ゆは。青電嶋の鐵四雅漢。并に屠嶮余漏の嶋長ハ。草臚ハ。戰役を
ゆ。ゆ。今夜ハ。先安息し。是。南門を攻んと。酒を取。痛飲して。醉臥
ゆ折。周勝。ゆは。夜討せり。逃く。本嶋。ゆ。ゆ。ゆ。草臚死す。

功と成さず。身方の不利と云ふが、用心を怠り、酒を飲り酔臥す。立足むるが
敗北せん。理のなき死所也。是より下第三十六回、李俊が諸大将を分ち遣
し、音電、屠崖、余漏の三嶋、長と征伐する。彼等、はる奇計を化
評するが及ばず。中より、来り玉、危成の鐵羅漢と討滅す時、士卒毒
水と飲り死むんとせし。安道全誨へ、甘草湯を飲り、毒を解す。是より
あり、三嶋、長、各洞内へ逃る。重なりしも、みるに、趣へ鐵羅漢の来り玉、
焚殺せし。又朱、黄、信、穆、春、の釣魚嶋、余漏、天と刺滅し、
段の去り、屋物、巴、承とら、大蛇あり、その肉、美し。補益、延命、の菜と云
無條の細評、まゝ釣魚の陪襯と云ふ。然るに、王官の、まゝ作り言ふべし。又、周勝、
楊林、童猛、屠崖、を討滅す。段、嶋、長、石洞中、閉籠り、死に、攻め
とせり。是より、屠崖、が愛妻、秀姑、とら、美婦あり。又、揚州の人、方

明と喚ばれり。揚林、料らむ。この方明の子引はる。俱に洞内に入り、
ゆゑ、且、秀姑、が、資、は、少、く、屠崖、の、酒、を、醉、臥、せ、し、時、の、首、を、挿、て、お、
関勝ツカシ、小報ツカシ、を、し、屠崖、の、妻、を、并、に、奪、つ、刺、滅、す。この方明、又、母、を、
揚州の人、おせり。後、秀姑、と、揚林、の、妻、を、せ、り、為、る、れ、が、秀姑、の、衛、門、屠
崖、を、掠、奪、せ、り、遂、は、後、側、室、を、し、り、て、堂、を、設、け、し、り、亦、種、を、し、り、
吾姑の婦人、おむ。揚林、の、功、徳、を、感、し、り、これ、を、取、り、た、り、亦、生、り、
拘ツカシ、り、亦、お、む、の、亦、種、を、し、り、也、と、喜、ぶ、り、舞、を、し、り、亦、お、む、
後、回、は、諸、將、官、の、毒、を、取、り、段、子、再、娶、り、亦、お、む、嫌、ひ、ぶ、り、宋、國、の、女、人、
足、ら、ぬ、故、に、作者、の、用心、後、を、し、り、か、の、く、亦、種、を、し、り、也、評四十五
第三十七回、徐神公、題詩の一章、八、之、明、回、暹羅王、春、遊、の、照、對、牡、蛎、
灘、に、李、俊、を、高、宗、の、駕、を、救、へ、一、章、八、李、俊、既、に、王、位、を、踐、し、り、也、

有年云。第四十六評中。赤裸嶋の名と。ベララ云。此島煮より。五穀金銀銅鉄紙帛。衣裳冠裳かく。女の草葉と垂れて禪を亮。男は是も有事か。されども親子兄弟夫婦の別は自り。家居の本の柱の簀子草葉をも家根と草。又垂れて壁障を亮。平常芋の類と食を。日本の里芋と大同小異。味を美。二年ベララは在。婚姻あり来て見よと云。久居の故。自言語も通するが如く。引くは其楚と連る。各自土鍋して芋と煮ると持寄て。あやも唄として。歡興するといふ。かゝるを。卷宗又同。只唄するの。暹羅より二三年一度船来。鋸小刀と齋。海鼠と交質す。海鼠も弓して射て取。狐嶋の情態思や。其後福建は届るの時。某寺に詩号参詣の事と評され。寺して雜劇興行す。丙戌八月長崎は届るの日。有司より種々尋問の事あり。ベララ云。嶋名更も不知。但蛮夷の属嶋故。清国にて不知やと答。又福建某寺は平常雜劇か。是は漂客辭散の爲に權ると答。此事清人並通事等連印の上書と故有て密に見る事あると以て。暗記の條と寫して蛇足と添。此評はつゝぬ事ある。嶋名未詳とある。因て。

られて丙戌年秋八月。長崎は届り。その間七ヶ年と歴て五人は死し七人帰朝す。其の暹羅より。清の福建に到る海上の日子。本傳は作。如く。速る。のよあむ。又長崎より。暹羅へ到る水行の里數。天竺徳兵衛記も。そのよあむ。本傳も亦本傳も他り。如く。速る。のよあむ。本傳も亦本傳も他り。暹羅の属嶋清水澳へ。纒小兩日より到り。そのよあむ。傳り物語の如く。其れが。就中本傳の。暹羅をの。宋の附庸と。其の故。金教鬼山を。金教鬼嶋は作り更。其の往還を近くする。作者の。外夷を厭。宋と暹羅と遠く。彼此一世界と。評四十六。本子俊暹羅を一統。めとび金教鬼嶋は到る。時。道士徐神公酒宴の席上。来臨。詩を賦。仙術を。其の爲。三國の時の左慈に似る。の。趣。本子俊。官と俱。牡蠣灘に到。金兵と討退け。

宋の天子。一介の功績あり。その故に牡蠣灘の故事と撮合し。忠義の
勲功を全うして遂に冊封の正位を明くす。局を結ぶ。原来暹羅の属嶋
金敷鬼嶋と喚ばる。蒙古史の第三十七回の評云。按別傳高宗因
金兵臨安。遂航海。後温台舟。渡于牡蠣灘。灘之上。有金
敷鬼山。山上有金敷閣。閣上有徐神翁詩。與在潘郎所得道
士詩合。即本傳所載之詩也。金敷鬼乃山名。閣名非嶋名。在口
州府境內。亦不属暹羅。本傳乃借用耳。その評精知なり。その事
實を辨る。不足す。本傳を録し。暹羅の属嶋二十四嶋。虚実
相半也。且暹羅より唐山へ往還の途。速る。作者筆力之著。ん為る
べし。曾慶辰年。陸奥州伊用郡。破嶋村。清吉等十二人。赤裸嶋に漂流し。
赤裸嶋より暹羅に到り。暹羅より清國。福建に到り。福建より護送せ

嶋名未詳

られて。西成辛秋八月。長崎に届たり。その間七ヶ月を歴て五人の死し。七人帰
朝す。その暹羅より清の福建に到る海上の日子。本傳を作る如く。速る
る。よあむ。又長崎より暹羅へ到る水行の里數ハ。天竺徳兵衛記に
そる。そも本傳に他りし如く。速るる。よあむ。本傳に薩摩津より
暹羅の属嶋清水澳へ。纒ふ兩日。よあむ。到りし。よあむ。他物語に如く。
よあむ。就中本傳の暹羅をのり。宋の附庸とす。その故に。金敷鬼山を
金敷鬼嶋と作り更す。その往還を近くする。作者の。乃外夷を厭へ。
宋と暹羅と遠く。彼此一世界とす。評四十六
太子俊暹羅を一統し。めとび。金敷鬼嶋に到る。時。道士徐神翁酒宴の
席上。来臨し。詩を賦し。仙術を弄す。その為体。三國の時の左慈に似
たる。その趣あり。太子俊。然る官と俱し。牡蠣灘に到る。金兵を討退け。

遂に高宗の御駕を救ふ。金鰲島へ傳へて、王朝恩趙嗣良が。金朝へ投降し、御道尋らうと生拘来り。四割提各八十。高宗臨安へ見ゆの後、死罪を乞ふとある。勸懲を本づく。就中趙嗣良、金國の禍を用たる。其罪王朝恩より十倍。其死刑の光景を詳しき。いふ宜しかん。其死を字漏せし。看官飽ぬ心地也。其の時高宗の徐神公の詩を云く。云々の。其日天の祥より云く。故事あり。其の撮合もつ。高宗暹羅國に到り。新春の朝賀を乞ふ。其の上は評せり。宋と暹羅を。所應唇音。其の一世界も云く。異日大臣を勅書と齎し。文武の大臣を封拜を乞ふ。高宗明州へかへり。其の評を云く。高宗暹羅に在り。程。宋の群臣知らる。其の驚れ自愛ひ。其の往方。其の事あり。其の例の

小批より。漢^カ俗者の陳^カ。其の評四十七

柴進、燕青、樂和、蕭讓、呼延灼、李忠、孫立、徐成、二千の兵を領す。高宗を送り、臨安に到り。西湖の昭慶寺に寄宿す。勅命を候ふ。段并小西湖の景致を歴覽し。六和塔あり。武松と再會し。各々舊時と相識段の趣あり。其の心地を云く。武松の廢人となり。故に浮世と道れぬ。前作好漢中の巨擘。李忠、孫立、燕青、其の數人。暹羅に到り。以前に武松と再會し。談合敵あり。其の役のほり。其の事あり。但孟太后の懿旨あり。臨安城中。大相國寺に移し。建す。及。武行者と請ふ。國師と。魯智深一派の法脈。着實興旺と云く。武松の真面目あり。作者の用心。其の時俗の快。其の事あり。又。武松の事。武松は因にあり。其の

本傳に武松と再會の文なきは遺憾に。時野哥の徐晟が殺者なり。得る膽
安ふまゝ武松は對面し。武大金蓮の舊話及び、いざ看官の感深
む。かく野哥の武松は後ひく出家得度しく。暹羅をかへしむを
わが他が江忠の食客なるも。蒙汗毒をゆる。旅客を引ヒ引キせ。罪障消
滅のゆふなり。共清の女兒と娶ふは勝徳。かの共清の女兒は菩薩頭陀と
恨むも。竊に燕音樂和合。頭陀が塔上は隠れをみ知せる。その
功ありしは。ふあ共清の國主と我迎の時。一言親を諫めたるも
る。その後父の命より。頭陀の妻なるも及て。又推イ辞キするゆゑなり。かく又
共清が伏誅の後。頭陀とみ。擁擁するも亦不義に。ゆゑに徐晟が
野哥の鳥の前約とて下と。共清の女兒の命を。野哥の妻とする。就中
甘心する。かれが野哥の共清の女兒と取付。武行共の後弟なり。ある月一

段の光輝を増す。前傳の照對を。のぼりとせり。又その時。燕音。柴進。果
和。蕭。豫。晟。徐。成。等。が。李。獅。々。と。訪。ひ。り。ま。ど。一。事。由。漏。ま。と。り。亦。是。前。傳。の。末
局。る。れ。も。九。の。文武八員の官人。昔日の柴進。燕音と異に。國主より。天子の
勅命と傳へる大役と帯る。西湖と遊覽するも。謹慎の疎る。昔日枝
李獅々と相會す。忌憚るとる。いづれもや。李獅々の燕音。柴進。を再
會するも。いづれも。又。また。所。詳。る。も。段。を。さ。る。て。有。り。あ。の。ゆ。ゑ。に。あ。る。あ。る。
べ。か。て。燕音。柴進。の。風流の餓鬼。かて。昔。更。の。人。相。会。は。か。し。評。早。八
暹羅の君臣。冊立封拜の勅使と。宿大尉。渡海の時。柴進。も。文武八員
御道す。その勅使と宿大尉。亦是。前傳の末局に。宿大尉の。さる
先ず。安道全。が。汴京を亡命の時。又。夙。怨。草。草。の。焦。面。鬼。の。証。訴。と。い。ひ。し。も。
汴京に到りし。とも。皆。の。庇。護。と。仰。ぎ。り。一。部。の。繫。累。と。い。ひ。し。も。官。に。送。れ。し。世。

よめをいふに至り宿大尉の。宋江を愛顧する。始り終り。その人々のあ
へども。かく又暹羅の君臣階級の段に至る。聞煥の娘の。李俊の娘の。
撰配され。呼延灼の娘の。徐晟の妻とせられ。呂小姐の。呼延灼の妻とせられ。蕭讓の
女見の。宋李俊の娘の。盧俊徳の娘の。燕青の配と。九人の嫁取の一段のりたる。過て
さくし。九人の看官飽く。此地を。李俊。聞小姐と取り。後故の暹羅王の妃蕭氏の
宮中を避けて。駙馬府に在。蕭妃極めて。賢明な婦徳あり。始り。一更も及ば
ぬ。そを。然るを。李俊の。花駙馬の。譲り。み。み。同王に。を。か。歎然と。評
ふ。又楊林が。方明の。女見。秀。結と。娶。樂和。宮城。吳。采。仙と。娶り。一。唐山。人
の。女見。あれ。ゆ。ゆ。ま。と。沙龍。が。外。妻。あり。兩個の。在。女。と。妻。つ。の。の。の。の。の。
を。聞勝。時。延。灼。の。教。人。の。家。眷。あり。本。傳。聞勝。の。子。を。と。我。ら。聞勝。の
國。羽。の。後。衣。同。心。と。い。ふ。看官。の。具。履。餘。の。好。漢。より。招。別。ん。は。と。する。を。遣

憾あり。その正史の際に。聞勝の劉豫を害せられ。その子。聞某あり。武勇が
略。父。の。弟。も。徐晟。呼延灼。を。ひ。く。後。日。暹羅。に。到。ると。い。ふ。聞勝。が。子。
着。る。が。却。尉。の。多。う。ん。う。看官。を。愛。さ。す。こ。い。ふ。獨。聞勝。の。こ。の。か。林冲。晁蓋。
盧俊。義。も。心。後。あ。せ。と。い。ふ。晁蓋。盧俊。義。の。梁山泊。に。到。る。後。家。眷。
あ。る。の。ゆ。え。も。その。妻。腹。の。子。を。お。せ。い。れ。る。ゆ。え。も。あ。い。ふ。林冲。の。妻。の。張氏。
夏。死。す。又。晁。蓋。の。子。の。あ。い。ふ。を。い。れ。る。が。猪。園。に。入。る。鬼。生。朝。奉。の。故
事。と。撮。合。く。林冲。が。孟。州。へ。刺。配。され。時。の。妻。懷。妊。二。月。に。及。ぶ。い。ま。分
晩。せ。ぶ。く。夏。死。す。一。家。中。の。七。人。も。男子。出生。を。張。教。頭。の。旨。回。使。を。知
ら。れ。る。ゆ。え。他。郷。の。親。族。許。進。一。く。美。食。を。か。成長。く。林某。と。呼
ば。る。を。作。ら。い。ふ。看官。の。感。際。と。い。ふ。一。百。八。人。中。の。林冲。の。特。長。を。可。愛。に
好。漢。と。い。は。れ。る。ゆ。え。林冲。の。子。を。い。ふ。ゆ。え。作。ら。ん。去。前。使。を。干。ら。ぬ。星。丹。

再考 宣和遺
事 林冲
あり

甲乙と多く加入見たり。是は優りく受たり。後傳の作者。これらの趣向は
及ゆりし。一百八人の取捨は。原書にありし似たり。又晁蓋の梁山泊用起の好漢
をも。百八人の内は收れりし。後宋江を。寨主に做せし。一かづかれが。これら
宣和遺事及癸辛雜識に載る。宋江が大将二十一人の内中。晁蓋ありし
林冲なり。かれは後傳に。晁蓋が子と作由て。羅羅王に做せし。及び故に
べし。又盧俊義は。宋江は用を。謀れり。家産を失ひ。當初の爲替と
と不可愛た。漢に。その親族盧俊義の女兒の燕青の妻にあらざる。このま
るは飽ぬ心地を。凡この二好漢。必後あせまり。ありし。評四九

高麗王李侯。みかろ。暹羅國へ到來し。李俊は。對面し。その同性を。結びて
兄弟にあり。且公孫勝と師弟の約束あり。翌年。國事を。世子に。譲り。ゆが。暹羅
の丹波段官。來り。留り。生涯の。所せし。との段。蔡旻が。評し。又。と。と。

李俊が水滸
記の漢語を
和む。云々の
作者の。その
唐の太宗の
故に。李俊
し。蔡旻は。公
明筆削して
自り。ありし
し。却て。あり
なり。ありし。

高宗日進羅へ。まませし。と。李俊は。ある。て。高麗王と。謀り。合し。和乱を
防げし。と。安道全が。高麗王の。病を。療治し。と。照應を。せ
し。あま。たり。し。は。過。ぎ。り。し。け。れ。は。あ。ら。は。し。ま。ま。し。有。官。に
厭。つ。べ。し。と。下。國。主。四。十。二。人。の。功。臣。と。共。し。元。宵。の。燈。を。と。り。段。の。常。州。ま
燈。と。す。る。照。應。の。の。宴。會。に。文。臣。侍。を。献。し。梨。園。の。子。弟。と。戲。を。呈。し。
段。原。本。水。滸。記。と。瀕。と。あり。水。滸。記。の。宋。江。が。百。八。人。の。と。院。本。は
作。り。し。重。訂。本。は。定。海。記。と。瀕。と。あり。定。海。記。の。周。の。美。成。を。ま。の。填
詞。と。し。乳。豎。公。一。代。の。と。瀕。出。る。と。水。滸。記。の。あ。ま。り。は。致。れ。し。過。は。れ。し。蔡
旻。筆。削。り。し。定。海。記。に。ま。り。し。乳。豎。公。一。代。の。義。氣。行。状。と。李。俊。の。妻。を
傳。れ。し。御。子。榮。進。燕。青。等。の。臨。終。の。時。伶。人。俳。優。と。ま。り。求。め。り。
本。國。へ。領。り。た。り。し。あ。の。の。宴。會。に。用。ひ。ん。為。し。後。傳。の。作。者。の。約束。を。旨。

とて一事も漏さむ。用心精細なるも似れども。李俊は暹羅を一統し
る。後の物語一卷第十四回あり。これを其間の俗にカシルとて、
カシルとて、文勢脱し。餘古文の長は、ウラヨ共清薩頭花滅之
し。後ハ、二回あり。多々局と結ぶを妙とす。如のどなり、
實にダシルとす。へ。これにも、前作の送るを据拾して、一人一事も漏さむ。本傳は
初々出世の人物の列傳も亦精細なり。大放ち、陳蘇の文奇。唐の
作者より、多く、注をた知筆なり。一部の趣向の上、評は、
る。このも、予を、これを、カ原とれは、是中平の作也。ま、上、
多、これにも、水滸の後傳は、カ十二分の、カ後、カ改、カあり、カと、カ者、カ官
これを、ヨ喜、カは、カ多、カを、カし、カ評、カ五十

結局最行の文内、新舊二本、多く異同あり。原本ハ、カ國主、カ後、カ至、カ七
旬傳ハ、カ位、カ世子、カ也、カ到、カ丹、カ段、カ宮、カ修、カ道、カ壽、カ至、カ八、カ十、カ無、カ疾、カ而、カ終、
血、カ公、カ卿、カ盡、カ高、カ年、カ唯、カ有、カ公、カ孫、カ勝、カ至、カ一、カ百、カ二、カ十、カ歲、カ解、カと、カあり、
又、カ重、カ訂、カ本、カハ、カ國、カ主、カ政、カ務、カ之、カ後、カ傳、カ位、カ世、カ子、カ也、カ云、カ云、カ國、カ主、カ李、
俊、カ直、カ活、カ到、カ一、カ百、カ二、カ十、カ歲、カ無、カ疾、カ而、カ終、カと、カあり、カ公、カ孫、カ勝、カハ、カ却、カ八、カ十、カ餘、カ歲、
少、カ解、カト、カ李、カ俊、カの、カ壽、カ一、カ百、カ二、カ十、カ歲、カ作、カる、カの、カ多、カの、カ天、カ壽、カ星、カと、カれ、カ評、カ幸、カ一、
王、カ進、カハ、カ前、カ傳、カハ、カ是、カ最、カ初、カ出、カ世、カの、カ好、カ漢、カ也、カ且、カ高、カ侯、カと、カ對、カ頭、カと、カ傳、カし、カ事、
他、カを、カ最、カ初、カと、カ也、カ然、カる、カを、カ前、カ傳、カハ、カ其、カ終、カる、カ所、カと、カ詳、カし、カせ、カ也、カ作、カ者、カの、カ腹、カ内、カと、カ推、
量、カす、カ也、カ忘、カれ、カる、カ也、カ前、カ傳、カハ、カ高、カ侯、カハ、カえ、カま、カま、カる、カ也、カ本、カ意、カと、カて、
る、カ故、カに、カ取、カ初、カの、カ敵、カと、カり、カ王、カ進、カも、カ亦、カま、カま、カる、カ也、カ其、カ終、カる、カ所、カと、カ隱、カし、カ也、カ其、カの、
世、カの、カ一、カ百、カ八、カ人、カの、カ好、カ漢、カ皆、カ皆、カ皆、カ歸、カる、カ也、カ王、カ進、カの、カ之、カ傳、カ歸、カる、カ也、
那、カ一、カ百、カ八、カ人、カと、カ一、カ列、カを、カぬ、カを、カ明、カ也、カ後、カ傳、カハ、カ王、カ進、カの、カ之、カ補、カを、カも、カを、カと、

梁山泊殘剩の好漢等と一列にとへうと。我々の王進の昔田初母親は
所云老種 俱く神師道経畧相公 子後んとくや道中あり。路は迷ひて深山にひ
 降り料を異人は通近く。仙體を飲り熟睡する夢の中梁山泊なる
 宋江等二百八人の得失榮枯最後は李俊が羅漢の王はありしを
 ぞとせしむ。母子共信を誓ひて奇異の多しとせしむるあり。かく路を
 求め里をゆく人は同宗。只一夜申とひる。光陰既に五十餘年を経る。南宋紹興
スエ の季やありけり。此れ那ナ 一百八人の古又の趣も。親子がたの夢を違ふ。此の
 人間の忠奸邪正榮枯得失の理を感悟して王進は又人とまをむ。更之又
 母と信よ。名山は隱れ道は修とひきく地仙と稱すとせしむ。このあそく局を結ぶ
 水滸竹前後二百六十回の釋說を王進母子の夢に托す。世と評俗を
 悉くする。迂儒の口を封ずしむ足らん。かく史進が王進は泊再會を

かたりく縁由もあまきり分明るべし。車王進は始りて車王進は終りあり。
 照應も亦分明なり。看官拍案稱美すべし。後傳の作者思ひの及ば
 王進も混江龍の将官は飲しとふ。かたもくみむ。若くは僻言
 るんか。羅漢等なるは世にあり。同くはくはありけり。評五十一
 羅漢ハ大團圓。あまきり多の困臣の姓名をありとふ。の續小三人。金鼓嶺の守將
 沙龍。大將軍。丞相共濟これの。薩頭陀。草鵬。草鵬。鐵羅漢
 余漏天屠。嶺の嶋長を加えり。十人。過江。原。若。羊。の。為。る。也。李俊等四十二人
アヒテ の敵を共濟。薩頭陀が滅せの段。ゆり。ある。あり。評五十二
 公孫勝風雪の法術をもく。大敵を刺滅する。この段。某日。天。の。響。評。云。寫
 公孫勝建第一大功。後。面。之。言。高。射。石。子。射。方。為。無。愧。真。寫。得
 好。との。へ。る。は。け。り。勝。の。原。來。方。外。の。徒。の。原。原。來。利。を。甘。ん。ど。

俗と免れつものなり。かく百二十歳なり。解せんと心とれし。落五十三

葉目天が惣評 首巻 第二十五則 後傳の文法と評解し。何の法。れ

かの法とある。前傳の金瑤が文法を評解する。餘評を撰む。大約

釋説と爲す。文の法則ある。説を。況多名目と立す。人子説は、

い。文子臨々千変萬化。蓮の糸と引く如く。只の作者の才に任す。自然

妙文のいでもあるものなり。後人の法則と守る。よく作らんと評する。必

く。あれらの評論の。とく。多の文と神なり。曲學の後生と。悉くして。必

第三十四回の惣評も。大小教段の文法を評解する。是亦作者の求め

一回の教段と作爲す。子あふ。覺む。自然。然るもの。文の法

則ちか。まれ。是。是。星の。釋説と評解せんや。必しも信ま。評五十四

前傳の。百八人皆彈蹄あり。後傳の。新。出。五人の外。彈蹄あり。春

これの亦。前傳の。作者の用意。また。格。周密の。幸。雜。載。子。載。方。

龍聖與。作。宋。江。二十六。頁。序。曰。余嘗以。宋。江。之。所。爲。雖。不。得。自

盡。然。其。識。性。超。卓。有。過。人。者。立。說。既。不。僭。後。名。稱。儼。然。猶。猶。猶。

軌。轍。雖。託。之。記。載。可。也。續集上 卷一 宋江の二十六人の彈蹄を

僭稱せざる。羅貫が水滸傳を爲す。及。地。熟。七。十。二。人。を。附。増。し。亦

彈蹄を肩し。後傳の作者の意を知か。呼。延。鉉。徐。晟。元。逢。春。宋

安。平。の。數。人。必。彈。蹄。あり。あ。る。は。は。は。は。及。び。り。も。亦。前

傳。他。去。の。意。息。と。山。石。歸。ま。る。を。ま。る。べ。た。の。こ。又。抄。作。す。右。の。幸。幸。雜。載。を。ま。る。

周密の字を公謹とひたり。宋末の人あり。元の國初を。當。時。宋。江。の

三十六人の像。世。傳。水。滸。傳。三。十。六。人。像。亦。龍。共。高。士。筆。而。明。吳

餘客話云。世傳水滸傳三十六人像。亦龍共高士筆。而明吳

倫見ハ山宣の誤之〇立法逾年改號去ハ末の誤之〇金
滕哲言約爲故草〇表王貶黜一尺布諱黜一書作黜諱
當作諱〇聖儒倡義欲南遷聖ハ聖宣の誤之〇萬歲歲之
〇而兩之〇日厚澤當作仁厚澤〇小比穴則天崑崙崑天
得之〇青苗法行傷國取鄭俠繪圖忤安石繪ハ繪
圖ハ圖の誤之原本青苗法行條安石鄭俠繪圖傷國
脈ヲ作之是と云〇天中橋上原本作天津橋上爲是〇
首悽幸有范水公悽ハ檢范ハ凍の誤之〇日朝榮日
内の誤リ翰ハ當作翰〇元祐來人來ハ崑崙の誤之〇免成許
識免ハ竟の誤リ許ハ詩の誤之議當作議〇渡九田一冊ハ
哥の誤之〇二聖環且去地後日且去ハ去地ハ程の誤之

〇蠟生圖曹之〇甘心慳膝微臣構甘ハ甘姪ハ屈微ハ微情ハ
構の誤之〇不可後移之〇侍奏雨宮字莫倫奏ハ奏雨ハ兩字ハ
孝倫ハ倫の誤之〇魏山朋灘勢ハ勢灘ハ潰之〇待郎侍郎之〇計
蟬附ハ聞蟬ハ蜂之〇東陽襄陽〇寡未歇寡ハ寡の誤之無計
計ハ寸の誤之〇星亭阜亭之〇就義就ハ就之〇廿五日黃冠
獲絶此獲ハ獲の誤之〇叫杜鵑叫ハ叫鵑ハ鵑の誤之〇回首
斷知烟之〇有髮白髮之〇續蒼白編續蒼白編之
るべし只是一編の題詞中ニ誤寫謬刻のヨメウをとかの如し本
文に至てん々あり故筆子自送ありと云々原本をゆり校讎言訂正の
手を歴るゝあり故博覽強記英才敏提の大儒先生といふも孰
ゆりこれを讀むべし唐山ハ是文字の國といふる坊賈の利の爲也

恥づも知れや。仕入物の唐本あり。誤字もまうゆを常とすまじも。
かゝる甚しむを稀にひとり嘆息のあり。首巻の数を抽出したる好
事の癖あり。好まざるの癖あり。評五十七八全

まその愚評ハ只大略を挙ぐるのみを細く評しなむ。あるは教十
頁の紙筆也。昔は至るべし。亦亦要るべし。かゝるやてゆ
やみある。柳唐の釋史あり。必後人の批評あり。皇國の草紙物あり
おん今も昔も評せしめあり。をよるべし。て味あり。とく稀なるゆゑ
之なり。ゆれが教の筆もまうゆのみ。述の如く唐のこえり。又もゆ
いささかあり。

天保二年辛卯夏肆月十九日著者作堂老先武れしるす

